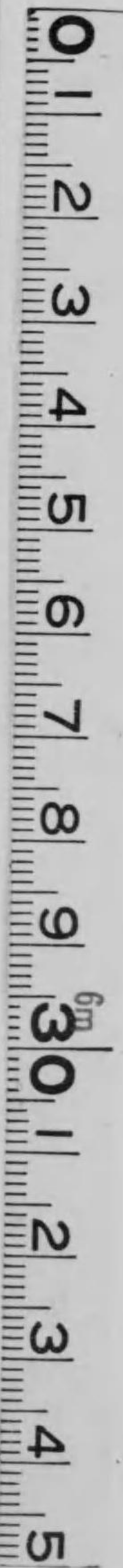


67
401

璞屋集



始



字井可道遺稿

璞屋集

67-401



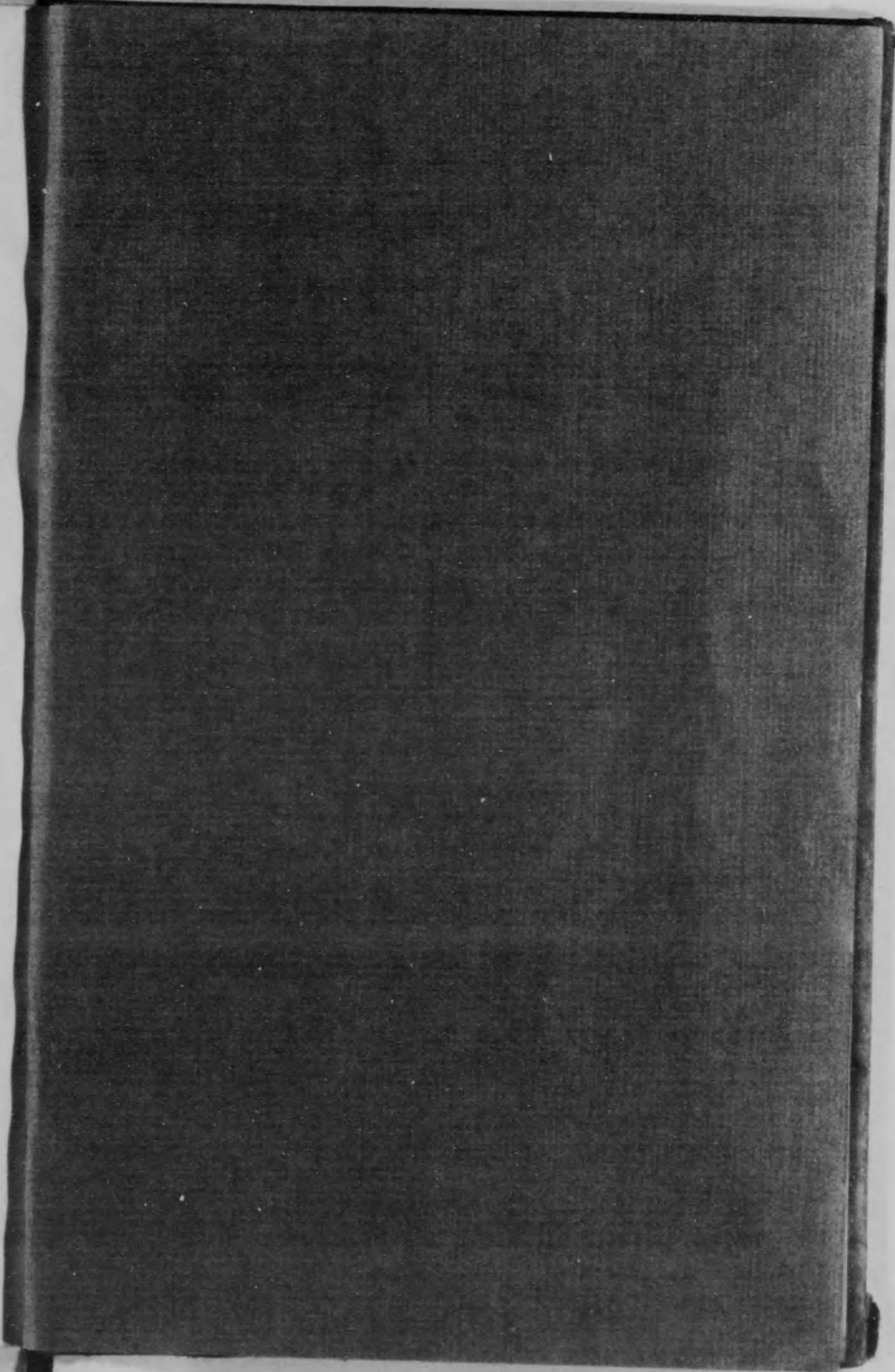
宇井可道遺稿

璞

屋

集

編者寄贈本



謹奉寄

くまの路...
可道

補

世...
可道



序

璞屋の主宇井可道大人は其性温厚にして記憶力いと強く常に國文歌書等を多く讀まれ特に又文書くことを好まれて日頃見もし聞もしたる事どもは一々之を書き留められたるが璞屋隨筆とて十數卷もあり此大人若かりし時に其頃皇國學の大家なりし田邊の櫻蔭熊代繁里大人の門に入りて皇國學と和歌の道とを學ばれ上三栖の里より二里にも餘れる道を遠しとせで時々其許に通はれて數多き教子の中にても歌の道にすぐれさせてむねと之を嗜まれ漸くそが至り深くなりて吾が木の國はいふも更なり他の國々の歌の上手てふ人々の中にも數まへらるゝに至りけりさて去ぬる明治二十二年の頃にやありけむ大人は舊櫻蔭大人の許にて同門弟なりし多屋梅窓那須宗道那須宗正湯川暢などの主たちと共に晚櫻社といふを設けられて花の晨月の夕は

更なり月毎の會に出で、はもはら後進の人たちを導かれ共に其情懷を歌はれし歌ごもの中にてさるべき歌を撰り集めておそ櫻集と名づけて三編まで頒たれたりこの大人の名の廣く世に聞ゆるまゝに近き郷遠き國の人々より其詠みたる歌の添削歌合の判など請ひ來るものから公の務の暇に之を見るさへ維れ日も足らぬばかりなりき己は大人のみをしへを受け初めしより今年迄に三十四五年にもなりぬべしこの大人今年八十六の高齡をもてみまかれたるが其間に詠み置かれたる短歌長歌旋頭歌今様歌など一萬二千餘首を數へらるゝがこたび其世嗣なる龍水縫藏主がそのうちより一千八百八十餘首をわらび之を編集して璞屋集と名づけて摺卷にせばやとて己に一言を識せと請はるゝまゝに拙き文をも願す斯くはかいしるしぬ

大正十一年十二月

鈴木融しるす

凡例

- 一、父翁の歿後直に本集の編輯を思ひ立ち、倉卒の間之を成せり、數多き遺稿の中より、僅にその十の一二を選べるものなれば、故人の意に副はざるもの多からんも、今は詮なし、見る人之を諒とせられよ。
- 二、故人の遺稿としては、璞屋集十六冊、璞屋隨筆十七冊あり、璞屋集は慶應三年より大正十一年に至る、五十六年間に詠める歌集にして、短歌凡一萬二千三百首長歌百二十七首、旋頭歌六十七首、今様歌四十首を録し、璞屋隨筆の中には歌話「浪の藻屑」、牟婁郷名勝誌、紀伊國和歌集、女百人一首、悲哀百人一首、神武天皇御東征順路考、辨慶事蹟考などあり。
- 三、本編に收むる所、短歌一千八百三十五首（内、新年及び四季九百五十三首、戀四十六首、雜四百十二首、詠史三百六十首、支那詠史六十四首）、旋頭歌十七首、今

様十二首、長歌二十首、紀行文一章にして、本編に漏れたるものは、他日上梓せんとする、第二編以下に輯録すべし。

四、巻頭にかゝげたる、肖像は八十一歳の時の撮影にかゝるもの、短冊二葉は故人の筆蹟にして、そのうち「くまの路や」は本年十二月はじめ 東宮殿下和歌山縣行啓のをり、献上せんとして認めたるもの、書つぶしにて、その絶筆と見るべきものなり。

大正十一年十二月

編者 識

年譜

天保八年 八月二十六日和歌山縣西牟婁郡三栖村大字上三栖に生る、父は字井多右衛門藤積豊成、母は真砂氏、幼名を三平と稱す。

弘化四年 十一歳、五月より阪本彌平氏並に家兄勝之助に就きて習字修業、漢籍を兒島熊仙氏に學ぶ。

安政四年 二十一歳、八月兄勝之助病死す、十月嗣子となり、通稱國助と改名す。

萬延元年 二十四歳、九月實名を選びて可道と稱す。

文久元年 二十五歳、四月上三栖庄屋被申付、十月母病死す。

慶應三年 三十一歳、正月より明治五年四月まで、田邊藩士族熊代四郎左衛門繁里氏の門に入りて皇學歌學を修學す。

明治二年 三十三歳、八月國助を廢し八十八郎と改名す、但し衛門、助の字差支の藩令による十一月庄屋の稱廢せられ、更に上三栖村長及び下三栖村上組村長、被申付此際藩政へ寺院合併建白書を進達す、其慷慨を可とせらるるも一藩政の之を爲すを得ずとの事にて建白書を返付せらる

明治三年 三十四歳四月依願上三栖村長を免ぜらる。

明治四年

三十五歳、二月田邊藩管院頭取被申付、四月上三栖村長被申付、下三栖村上組村長兼務となる、八月依願上三栖村長を免ぜられ、更に長瀬村長被申付。

明治五年

三十六歳、三月田邊藩廢止に付管院頭取消滅し事務止む、七月和歌山縣第七大區三小區戸長被申付、此際村長は副戸長と村代に惣代と改稱せらる、この年八十一郎と改稱す。

明治六年

三十七歳、三月和歌山縣第七大區副區長被申付。

明治七年

三十八歳、三月中三栖村外五ヶ村社務所又は寺院を借受け小學校を開設す。同月教部省より兼補權訓導辭令を受く。十一月和歌山縣第七大區三小區長被申付。

明治八年

三十九歳、一月和歌山縣第二十二番中學區取締兼務被申付。

明治九年

四十歳、三月地租改正調査に付爲顧問該係へ當分出仕被申付。

明治十年

四十一歳、十一月依願權訓導を免ぜらる。

明治十二年

四十三歳、二月和歌山縣西牟婁郡書記拜命、同月田邊町へ轉住す。

明治十三年

四十四歳、二月勸業に關する山林沿革史を作り、五月水産沿革史を作る、其材料は田邊町田所八穂藏氏所有の田邊萬代記による。

明治十六年

四十七歳、一月東牟婁郡役所事務整理の爲東牟婁郡書記に轉任し、三月西牟婁郡に復歸す。

明治十八年

四十九歳、九月父泰四郎(多右衛門改名)病死す。

明治十九年

五十歳、九月西牟婁郡役所第二科長被申付。

明治廿二年

五十三歳、八月會津川堤防決潰し田邊町浸水す、自家の浸水を顧みずして罹災者救助につとむ、この頃同志とばかりて晚櫻社とふ歌の會をおこす。

明治廿五年

五十六歳、十月第一科長被申付。

明治卅一年

六十二歳、三月依願通稱八十一郎を廢し可道と改名の件許可せらる。六月勳八等に叙し瑞寶章を授けらる。

明治卅二年

六十三歳、特旨を以て従八位に叙せらる。十二月第一科長及び第二科長兼務被申付。

明治卅三年

六十四歳、六月依願本官を免ぜらる。

明治卅四年

六十五歳、二月田邊銀行支配人となる。

明治卅五年

六十六歳、三月田邊銀行支配人を辭し、その後は専ら風月に吟詠して老後の樂みとせり。四月高野、吉野、奈良、伊勢、京都等を巡遊す、「蛭子の旅」の紀行文あり。

明治卅六年

六十七歳、二月家督を嗣子継藏に譲りて隱居す。

明治四十一年

七十二歳、五月北陸地方を巡遊す、「汽車の旅」の紀行文あり。

大正元年 七十六歳、この年晩櫻社を改めて真璞社と稱す。
 大正六年 八十一歳、五月真璞社中より八十賀の歌會を催さる、兼願寄道祝。
 大正十年 八十五歳、十一月向商會の催あり、兼願鶴契齡。
 大正十一年 八十六歳、三月腎臟病にかゝり一時輕快せしが、その後再び重り十一月に入りて全く床に就き、十二月十日午後五時遂に逝く、十二日午後三時田邊町法輪寺に葬る、法名璞慶院快砵量正居士。

璞屋集 初編

宇井可道遺稿

短歌

新年

歳旦 始ありてをはりのなきは君か代と繰返したる年のをた卷
 新年 さしのはる朝日のるみに伴ひて年は早くも天たらしたり
 四方 雲の上に星をとなふる光より夜深き空もしらみそむらん
 朝賀 初日かけさし羽の色にかゝやきてめしの鼓の音ひくゝなり
 新年 大君の星をまつらす火影よりしらみそむらん曉のそら



新年雲
新年雪

二

年はいま日の若宮を天降るらん雲のどはりに赤根さすなり
めつらしく木毎に雪の花さきぬ梅またふくむ年のはしめに
あたらしき年の緒かけて門松に白ゆふかざる豊の雪かな

新年山

へたてなき御稜威もそひて立年の光や四方の山にみつらん
富士川や神代の雪のしつくより立年波も光そふらん

新年河
新年海

四方の海なこみ渡りて年波のたつの都ものどけかるらむ
百千たる家庭のけふり賑ひてみやこの空に年たちにつけり
松竹のいろあたらしく立年の都や千代の林なるらむ

山家新年

斧の柄に注連かさりして杣人も年をほどく祝ふけふかな
いつよりか身のほどくの松たて、年のはしめを祝ひそめけむ
あら玉の年のはつ日の先おひてまつ千代よはふ声たつの聲

新年鶴

年のたつ都大路の朝けふりゆたかなる世そ空にしらるゝ
大御稜威四方の海にやあふるらんたつ年波も豊かなりけり

新年祝世

新年祝君

君か代を千世にといはふ外にまた年の始にも思もなし

都鄙迎年

年は今都の空にあもるらんひなも朝日のはたなひくなり

貴賤迎年

年たては綾の御衣もしつはたの衣も今朝は新らしきかな

社頭新年

御民等は治まる御代を言ほきて新年いはふ神のひろ前

新年望山

年は今岩門あけてや出ぬらん天の香具山光さすなり

新年興

あら玉の年はき酒の千鳥足大路せましとよろめくやたれ

新年酒

くしの神つくり給ひし豊み酒をのみて祝はん年のはしめを

新年琴

かきひくはたかつま琴を年のたつ千代松風も音にかよひつゝ

春

立春

佐保姫のおるや霞の大みはしはた殿たかく春やたつらむ

社頭立春

八拍手の音もかすめり太祝詞はさくうちにや春は立らむ

神風はなきの木末にをさまりて枝もならさぬ春や立らん

三

立 春 霞
初 春 月

初 春 風
初 春 梅
早 春 山
早 春 海
早 春 湖
春 霞
春 淺

四
さのふかもくれぬといひし年の緒にひき續きてもたつ霞かな
春あさみ月のかつらの薄にほひまた物たらぬ心地こそすれ
春たちてまた三日月の細まゆにかゝるもうすき夕かすみかな
山風やはるともしらてさえぬらん月はかすみの薄にほひして
また薄きかすみにかけて弓はりの月も光を放ちそむらん
つらゝるし柳の糸もどけそめて木のめ春風たわす吹なり
梅の花にはひくはゝる朝毎に立そふものは霞なりけり
雪くもにけさは霞の立かはり春をよそほふみよしの山
春はまた霞の袖のうらせはみ波よりもれて千鳥鳴なり
みるめなき海とないひそ春もはや打出の濱の波のはつ花
ほの／＼と春たつ空の山かつらひきはへたるや霞なるらん
春のたつしるしはかりにひきはへし霞を去年のへたてなるらん
山風はけしきはかりに霞めども軒はのたるひゆるひたにせぬ

賭 弓
梅 花 先 春
風 光 日 新
春 色 所 々
氷 始 解
氷 解
若 菜
都 若 菜
洗 若 菜
殘 雪

五
のり弓のかへり主のうたけにもなほ勝さひの聲とよむなり
たよりあらは梅咲たりと告ましを春はいつこに冬こもらん
雪きわてかすみ立そふ朝毎にきのふにまさる春けしきかな
岩波の音もぬるめり吉野川かすむ野山のけしきのみかは
難波かた氷もけさはどけそめてけふるや芦の若めなるらむ
きのふまで結ひし氷どけそめてけさはみどりにかへる水かな
かた間にもあさる若菜は溜らねど野邊に心をやるそ樂しき
雪けのみまたは若菜もたけぬへし野澤のゑくもあすは摘てん
少女らか脛もあらはにおり立ちて裾野の若菜けふも摘なり
くはし女かかすそかゝけて雪きわぬ都の野邊に若なつむなり
おり立て若菜洗ひしきのふよりみどり浮へる里川の水
谷かけや雪のしつくの音きけは春の至らぬくまやなからむ
梅かをる片山里の北むかひ春をそかひに雪を殘れる

嶺 殘 雪
殘 雪 如 巖
餘 寒

春來れは高根の雪も佐保姫の霞の袖の綾と見ねつゝ
うふ湯くむころにやとけん雪たるま岩となりて佛さひせり
鶯のなくとはすれど風さわて梅か香寒き朝ほらけかな
風さわて雪けもよほす朝ほらけ霞の袖はたつ空もなし

都 餘 寒

少女等かたなそこ温め羽根つくと吹息白く風さゆるなり
ともすれは雪けもよほす朝風に都の空も霞みかぬらん

鶯 先 春

いつさかん春ともしらぬ梅か枝のつほみ敷へて鶯のなく
雪どけて若菜もゆれと春はまたかたなりなれや鶯の來ぬ

待 鶯

ふりはへて來鳴け鶯汝をまつと植たる梅のあるしゆつらむ

栽 梅 待 鶯

すゝみゆく世に後れしと鶯のなけともいまたかたなりにして

早 鶯

朝な／＼きけともあかす鶯の聲は日毎にあらたまらん

鶯

花といへは梅もさくらも大かたは我も顔の鶯のこゑ

陰曆正月元日鶯の來て鳴くをきゝて

鶯 出 谷

こよみをもしらぬ鶯春たつと誰か告げん今朝來鳴くなり

曉 鶯

谷かけの古巢を雪に守らせて都にいつる鶯のこゑ
光なき谷よりいつる鶯の初音にかすむ春のいろかな

朝 鶯

月おちてまた明やらぬ櫻戸の花の光にうくひすのこゑ
鶯の花のねくらやしらしらむらん匂ひ出たるあかつきの聲

雨 中 鶯

鶯の聲はかすみの奥まりて梅か香なからしむ空かな
うくひすの鳴聲なからうつし晝の梅さく空に朝日さすなり

雨 後 鶯

ものは皆あやなく霞む雨にしもおほろけならぬ鶯のこゑ
花に來て今こそなかく雨すきし竹によこもる鶯の聲

雨 中 鶯

鶯の聲のほひにとけそめてひくも清し雪の玉みつ
うるはしき花のものいふ心地して櫻か枝にうくひすのなく

花 間 鶯

木かくれてなく鶯の聲なから玉とこほるゝ花の朝つゆ
鶯の玉垣こゆるひと聲や神にたむけの初音なるらん

社 頭 鶯

鶯の玉垣こゆるひと聲や神にたむけの初音なるらん

閑居鶯
梅 薫袖
梅 香滿袖
朝 野 岡 田 社 名 霞
梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅

さゝやかにしめつる庵の小笹垣何奥まりて鶯のなく
ひとせの花のどちめと初花を梅こそ見すれ去年に今年に
雪きわて梅の下紐とくころは物皆ゆるふ心地こそすれ
梅の花ふれたる袖のあやしきは我袖ならぬ心地するかも
手ふれなはいかにかあらんよそなから見したにうつる袖の梅か香
朝風はまた寒けれど梅か香を吹入る窓はさゝれさりけり
きのふかも若菜つまんと雪わけし野司白く梅咲にけり
空たきもひとつ匂ひに霞むなり岡の屋形の夜はの梅か香
わら火たく賤か田ふせの煙にもさすかすつけす梅かをるなり
春たてはいかきの梅も後れしと咲てかをりをたてまたすらむ
梅か香をしるへになして夜ゆけはくらへの山もなつまさりけり
かけ残る月か瀬山の朝ほらけ梅か香ならぬ春風もなし
くれなるに匂ふ霞のうす衣は日のたてぬきに織れるなりけり

朝霞
山霞
遠山霞
峯霞
野霞
水郷霞
江上霞
海上霞
海邊霞
田家霞

花をのみおほふと見わし朝霞我行先も立へたてつゝ
歌垣のとはりとなりて筑波山八重立こむる春かすみかな
遠山のかすみ色こく白むなり花のかをりも立やそふらん
かつらきや長峯かけて引はへし霞や花のおすひなるらむ
春日野やたか若草の妻こめに八重垣つくる霞なるらむ
袖さねし八十字治川の網代木にひをへてかゝる春霞かな
長閑なるかすみの袖に包まれて玉江の春もおほろなりけり
きのふかも身をきるはかり風さねし太刀つくり江も霞む春哉
大井川いり江の松に流れ来てみどり深むる春霞かな
沖かけてたつや霞の袖ひろみおほひ残せる島山もなし
おき遠く霞にきわて行船の煙はかりそ雲にたちそふ
さねし袖のうら風音たねてゆたかに立るはる霞かな
あけまきか小田の畔やく煙より青草すりに霞む春かな

柳 月 前 柳
 柳 風 靜
 暮 村 柳
 水 邊 柳
 江 柳
 河 邊 古 柳
 門 柳
 堤 上 柳
 砌 下 柳
 春 雨

うらゝかにけふるを見れば青柳の糸は朝日のひくかと思ふ
 玉柳花見くるまの行かひに静心なく露ゆらくなり
 うちなひく柳の糸もおもりに風おほなる夕月夜かな
 長閑なる風のすかたは青柳の糸にかけてそ見るへかりける
 夕けたくけふり立そふ山里のなかはもゆる柳なるらむ
 かつら川柳の糸に結はれて水の上さらぬ薄けふりかな
 まゆこもる春の光やなひくらん玉江の柳露ゆらくなり
 初瀬女のゆふ花つくる糸かねと川へにもゆる古柳かな
 青柳の糸くり出す春の日に門守る犬も夢や結へる
 行すりの袖にかけてや結はまし長柄つゝみの青柳の糸
 もて遊ぶ玉のみきりの糸柳露結ふ間もあらしこそ思ふ
 松か枝の雪けしたる音はかり霞かねたる庭の春雨
 椿落る片山雉子しは鳴てほろ／＼雨の音かすむなり

朝 春 雨
 夕 春 雨
 夜 春 雨
 閑 中 春 雨
 閑 庭 春 雨
 庵 春 雨
 春 雨 晴
 春 月

鶯もとはぬ朝の雨そゝき梅か香のみそ窓にかをれる
 梅かをる枕のとけき朝ほらけまた寐もよふ雨そゝきかな
 鶯にいさめられても覺かてに雨の音きゝて朝いせしかな
 朝ほらけ風もけぬるくうちなひき柳にかすむ雨のいろかな
 つはくらめぬれつゝ歸る夕くれの軒は静けき雨そゝき哉
 うちなひく柳の糸に雨見わて結はれゆく夕けふり哉
 月かけは霞にきわて手枕の夢野の花に雨そゝくなり
 けふもまた花にとはれんかくれ家を霞にとさす春の雨かな
 つふ／＼と軒の玉水音はあれど苔に跡なきにはの春雨
 わくらはに落る椿の音はかりいほり静けき春さめの空
 雨はるゝ桃の林の夕日かけ薄くれなゐに露かをるなり
 天の川雪けの水やまさるらん薄らに月の影を濁れる
 いかにせんをすかゝけても臙なる月は袖にもうつらさりけり

春 月 隴
春 月 幽
春 月 幽 殘
春 月 入 簾
松 上 春 月
河 春 月
江 春 月
海 邊 春 月
野 春 月
祈 年 祭

出るよりおほろに霞む月見れはそこはかどなく物そ戀しき
いひしらぬ彌生の空の花くもり朧に見ゆる月のかけかな
玉くしけ曉いそく花の上に夢はかりなる月そのこれる
をすもれて霞める月の影はかり世に言しらぬ物やなからん
高砂の尾の上の松にねふるなり月も千とせの夢や見るらん
花の香に瀬の音やねふる六田川月は柳の眉こもりして
花の香に霞てくれし吉野川月さへ水脈をたどりかぬらむ
水鳥は床しめわひし流れ江のかすみの水脈にねふる月かな
みさひ江や蛙つまよぶ聲ふけてうすにこりなる月の影かな
よさの海波にねふりて春の夜の月更わたる天のはし立
櫻かりかへる野守か鏡にもかすむか月のかけおほろなる
豊かなる年こひまつる御幣にはいつれの神か靡かさるべき
うけひかぬ神やなからん豊にと年こひまつるけふの御幣に

山 春 曙
江 春 曙
水 郷 春 曙
若 草
草 漸 青
岡 若 草
野 若 草
堤 若 草
古 郷 土 筆

雉子なく吉野の花のあけほのおほろにおほふ山姫のそて
波の上におほろ月夜の影おちてゆらく玉江の春の曙
難波かたつのくむ声の薄けふり波をかすめて明る夜半かな
いつの間に日數つみけん七草の跡わかぬまでひこ生にけり
あけまさか笛の音もして野へは早牛つなくまで草たちにけり
生さきはいかなる色の花かさくひとつみとりの野邊の若草
もね出て春の光に霞めどもけふり短し野邊の若くさ
すまひくさ根強ければや道の邊に踏れなからに青み出けり
雪さねて雉子妻よふ片岡の草もねよけにもゆる春かな
雲雀なく野邊のくたちもね初て青くさすりに霞む春哉
すかの根の長柄堤の柳かけ駒つなくへく青むくさかな
つくくしなほ古里を守るらん昔すき菜の花に咲つゝ
古郷をたゝにすきなど花さきて人に心をつくくしかな

春 望
 水 郷 春 望
 海 上 春 望
 牧 牛
 歸 雁
 曉 歸 雁
 夕 歸 雁
 雨 中 歸 雁
 呼 子 鳥
 雉 子

薄みどりかすみの遠に立そふや賤か野をやくけふりなるらん
 水鳥の聲ぬるみゆく流れ江にうかふは春の霞なりけり
 熊野の海鯨のいふく汐けより沖つ大灘かすみそむらむ
 放ちかふ牧の若草はみたりてにれかむ牛のかた寐ふりする
 ふる里の雪にひくてふそりならで雁は霞にのりて立らむ
 つはめ來る契りしなくは歸る雁見捨てはせまし花の夕はえ
 大くらの入江におつる月を見て雁も立なりよこ雲のそら
 月はまた門の柳の眉こもり何にひかれて雁のゆくらむ
 なきてゆく雁の涙のぬれ衣は花になかけそ春の村さめ
 くれ深き霞のその呼子鳥おほ東なしや山かけにして
 呼子鳥鳴かたどめて山わけんまたちりのこる花もありやと
 梅かざる岡のやかたの朝ほらけ夢驚かしきす鳴なり
 ほろくくと小雨こほる夕くれの霞にぬれて雉子なくなり

岡 雉 子
 雲 雀
 朝 雲 雀
 夕 雲 雀
 燕 蝶
 胡 蝶
 菜 花

妻こひの思ひの色にはたされてつゝしか岡にきす鳴なり
 百鳥は花にさへつる春しもそひはりはうはの空に鳴らむ
 くれてなほ空にさへつる夕雲雀うかれ心のはてやなからむ
 糸ゆふをつはさにかけて大空に聲のあやをもおるひはり哉
 長閑なるかすみの中にたつちりは朝日にのほる雲雀なりけり
 床放れひはりたつなり朝露にぬれしつはさを空にはすらん
 くるゝまで翅にかけし糸遊のたゆれは落る夕ひはりかな
 里の子か歸るをまつや夕雲雀くれても野へに落來さりけり
 巢立して門の柳になひきよるつはめの雛の力なきかな
 いかばかり花のかをりや占つらん羽袖重けにとふこてふかな
 花といふ花にうかれてとふ蝶やあかたありきにいとなかるらむ
 咲つゝく菜の花衣きて見れば春は胡蝶そあかた守なる
 吾妹子に摘殘されしかた岡の若菜も花にさける春かな

桃 巖

桃 映

日

田 家

桃

待

花

初

花

花

折そへん花見のつどゝもね出てわらひも我をまつの下かけ
 春の野にはこつむ子かうなさせる領布も照かに桃さきにけり
 眞盛は人の面わも桃の花奪ひておのか色に見すらむ
 梅もいさ櫻もさすかくれなるの桃こそ春をわれは顔なり
 吾妹子か桃のゑまひのくれなるに朝日もうつる花盛かな
 賤かほすつゝりの袖もてるはかり門田のくろの桃さきにけり
 たのめ置し日數もけふは過ぬめり花のたよりや門たかへけん
 ものは皆返り來ぬ世に新らしく今年もさける初櫻かな
 あくやとて草木みなから同じくは櫻の花をさかせてしかな
 さくら花常にしさかは世の中のうきは皆からしらて過まし
 ささらきの有明櫻さきぬらん外山のすそにかゝる横くも
 花といふ花はおほけと花くはし櫻を春の主なるらん
 見るまゝに花にたましひ奪はれて萬のこともうち忘れつゝ

盛

花

風 靜

花 盛

朝

花

曙

花

曉

花

月 前

花

雨 中

花

霞 中

花

每 春

愛 花

花 映

水

あはれ世のほたし放れて櫻花七日は我もなれみてしかな
 我も世にかくあらはやと思ふまであはれめてたき花盛かな
 心さへ花にとまりてちるへくもおもはぬけふやさかりなるらむ
 色も香もけふまさかりの山さくら思ふことなき花の上かな
 かをる香に風もなこみて山櫻さかりの御代そ長閑かりける
 朝目よく花のしらゆふかをるなりとしある秋を色に見すらん
 鶯はまた夢さめぬ木の間よりあけほのいそく花のいろかな
 吉野山おほふ霞のひまもれてあかつきしらむ花さかりかな
 光をはゆづりあひてや匂ふらん月はおほろに花はかすみに
 咲たわむゑまひとなりてこほれけり小雨の結ふ花のした露
 佐保姫の花のすかたを見せしとや霞男の立かくすらむ
 身にかへてめてぬ春なき山櫻花もさこそはあはれと思はめ
 大堰川しつける影を底に見て花の梢にいかたさすなり

花似雲

いつれをか花と定めん吉野山雲のかゝらぬ峯もなければ

向花歎老

しら雲のそゝりかゝれる高松や尾上の花のさかりなるらん
いかなれば頭は雪とふるとしに花は今年もかはらざるらん

花留人

物いはゝくれても影は立れまししゝまそ花のなさけなるらん

對花言志

しゝまなる花こそよけれ物言はわかたましひは身にも歸らし

花下言志

眞さかりは幾日もあらし山櫻いさ駒とめてちるまては見ん

瓶花

水させは匂ひこほれて風しらぬをかめの櫻かをりみつらん

糸櫻

木末より花の白糸打はへて音せぬ瀧はさくらなりけり
糸さくら露ぬきとめてゆらくなり霞むと見しは小雨なるらん

櫻狩

馬にくら置てとくひけ雉なきて明る外山の櫻かりせむ

花慰老心

見るまゝにうきをさくらの花はかり我老らくの守りなるらん

松間花

立交る松の木の間の山櫻咲すはたゝの冬木ならまし

樹間花

たむけより檜原の奥に見し瀧は木立に交る櫻なりけり

花添山色

吉野山春のいたらぬ隈までもてらすは花の光なりけり

遠山花

ほのゝと遠山かつら明てなほかゝれる雲や櫻なるらむ

海邊花

遠山の霞いろこくしらむなり花のかをりもたちやそふらむ

河上花

汐風もかをる浦わの花さかり海人の袂もけふはほすらむ

古都花

よしの川そこまてみてる花の香に酔て若鮎もひれをふるらん

古都花

長等山さくらちるらん吹おろす嵐も白き志賀の古郷

谷園花

長閑なる春のはくゝむ花見れば谷ふどころもあたゝかけなり

公園花

飛鳥山あすはしらねと花そのに人の山をもけふはつくれり

禁中花

吹おろす天つ春風かをるなり雲井のさくらさかりなるらむ

社頭花

櫻花みたらし川にかけ見ねて白波かをる加茂のみつかき
あなたふとたれかは折ん千早振神の注連ゆふ花咲にけり

鬮鶏神社縣社に昇格の時臨時祭に

今年よりうへもあかたの御社と花の白ゆふかけやそふらん

古寺花 池上花 關路花 行路花 旅中花 旅宿花 花下友 花下宴 暮春花 落春花 曉落花

さくらさく雲の林の夕はわは佛さひても見ねぬ春かな
影うつる池のつゝみの花の香に水の鏡もおほろなりけり
あふ坂の關のこなたに駒とめて清水にしつく花を見るかな
ふり捨て誰かはこねん鈴鹿山關路の花にこゝろとまれば
駒とめて返り見すれば過來にし並木の松に花そまされる
花に來てわりなくとまる心かな旅の日數も返り見すして
草ふしも野伏もしらぬ君か代は花にやとらぬ夕くれもなし
くるゝまで花になつそふ蝶鳥や思へは汝もこゝろあひの友
くれぬとも木の下さらすうたげせんひまゆく駒を花にまかせて
下り立てかへり見すれば吉野山またくれのこる花のゆふはね
よしの山ふる里寒き山風にちるか櫻の雪しつれして
木末よりひとり放れてちる見れば風にはきせし花のぬれ衣
よこ雲の袖もかをりて吉野山花の木末に風すさふなり

月前落花 松間落花 落花隨風 海棠花 梨花 遲日 椿花 蛙聲 夕蛙 蛙聲 幽蛙

おほろ夜の月に向ひてふる雪は嵐もしらぬ櫻なりけり
なか／＼に千代はゆつらで枝かはす松のあらしや花さをふらむ
誘はれてちるを思へはうらめしき嵐や花の心あひなり
もろこしの吉野の山の種そとはその紅のいろに見すらむ
櫻にも香はおよはねと雪にしもはちぬみさをのつまなしの花
かをりなは梅さくらにも恥ぬへし雪はつかしき山なしの花
糸ゆふにひまゆく駒やつなかれし霞める空のくれんどもせぬ
いとゆふに結ほれつゝ眠るかな胡蝶は花に風はやなきに
花にこそ春も短く思ひしかちりにし後そくらしわふらむ
八千世經んしら玉つはきつら／＼に思へは長き花さかりかな
みとしろに蒔しゆたねを守かほに水口さらすなく蛙かな
ふる池のみしふかくれの夕かはつ何あらそひて雨をよふらむ
花ちりて月おほろなる櫻田になくや蛙の聲のかそけき

春 欲 暮
 春 暮 春
 春 埋 火 春
 春 天 象
 春 煙
 春 山
 春 川
 春 池
 春 流

花鳥はまた残れるを春ひとりくれて何處に行んぞやする
 花鳥も歸る野山のうす霞立へたつへきちからなけなり
 桐火桶かきならしつゝ妻琴の春のしらへをきくも長閑けし
 長閑にもかすむ御空の薄匂ひさくらの小野の花や咲けん
 佐保姫のかすみの衣うすくこく朝日夕日に染てほすらむ
 芦の根や底にもゆらん朝ほらけ野澤の汀けふり立なり
 長閑なる春は野よりも海よりも花さく山そゆかしかりける
 流れゆく水遠白し吉野川いく瀬さくらの影うかふらむ
 うら／＼と池のかゝみも打霞み波のしはさへ見ぬ春かな
 みよし野の花のかをりや流るらむ末遠白し紀の川の水

ある年の三月俄に風あれてあられふりければ
 これやこの龍のあきとの玉あられなけうつ音の只ならぬ哉

夏

首 夏
 世はなへて涼しき色になひきけり垣ねのうつき窓の若竹
 鶯は知らしな春は歸りても心の花はいまたちらぬを
 きのふまていとひし風を俄にもおもねりてまつ夏は來にけり
 花は根にかへる比とや尋ね來て若葉にそゝく夏の朝風
 桐の花にはへる夏のあさ風に松の藤波ちり果にけり
 月もいつかすみの衣かへぬらん卵の花かきに影なひくなり
 うつきさく加茂の社の瑞かきにゆふかけそへてかをる月哉
 三日月の空にはのめく夕けしきかすまぬ夏の色もさやけし
 卵の花のいろなる雲の立みれば山も霞の衣かふらむ
 神まつる卵月のいみの白かさねまた袖さむく小雨ふるなり
 としをいのる田中の里のうつき垣おのつからなる幣代にして

首 夏 風
 首 夏 月
 首 夏 雲
 首 夏 雨
 首 夏 田 家

首夏海
更衣

きのふまで霞にきわしよた子鳥夏は波間に生れいつらむ
夏ころもかどりの袖は薄けれど起居も軽し着心もよし
薄しとて何かこつへき夏衣はるの名残もかきりこそあれ

羈中更衣
餘花

橘の香どりの衣はうすけれどきてこそまため山ほどきす
吾妹子かつとにどしめしたひ衣花の香にさへたちや別れん
ほどきす尋ねいらすは山櫻あな卯の花と見てや止まじし
春すきて青葉に晴るゝ谷かけにおりゐる雲や櫻ならまし
ゆく春と別れてたちし夏衣木曾路は花の盛りなりけり

新殘花
新樹

ましるとも春は見さりし谷かけの夏を照してさく櫻かな
花の後目もどめさりし桃櫻若葉茂りて實さへ結へり
夏來れば常葉の色もめつらかに松も榊も若枝さすなり
みつゝしそはの若葉の紅にあたり照して茂るころかな
瑞枝さす葉廣くまかし茂れれと風のもりくる隙はあり覺

新樹風

朝新樹
新樹妨月

夏の色になひく繩手の若かつら朝ゆく袖に露をこほるゝ
妹かつむ新桑の葉にかゝりけり糸より細き三日月の影
月影を何うとむらん梅さくらてらし合たる春を忘れて

山新樹
新樹露

眞榊の新かゝみ葉の朝露に夏の光を見そめつるかな
夏山のみどりか中の立そはのこきくねなるの色もめつらし
きのふまで花くもりせし鏡山けさはみどりに晴わたりけり
薄もねきまたひとへなる衣手の森の下風寒くもある哉

杜新樹

殘鶯

柏木のもり來る風の涼しきや若葉の露にぬれてふくらん
立出し雪のふる巢のあたりとや卯の花かくれ鶯のなく
かへり來て都の春やかたるらん古巢にこもる鶯の聲

新筍竹

子にはあらぬ子は世に出て名のれとも親は古巢の谷かけに鳴
うなるらに扱とられしと竹の子はあくたかつきて生出にけり
皮衣けふもぬきけり竹の子は涼しき夏のとやしるらん

新竹露

小雀のふしよしと鳴く若竹の世心つきて露けかりけり
人の子もかゝれどそ思ふ生出し竹は千尋に早なりにけり
天そゝり世にぬけ出る若竹も根さしは親のめくみなりけり
生立のすくなる竹の子實に我うみの子も習へどそ思ふ

窓若竹

竹の子はまた世心もしら露の玉のかさしのおもけなるかな
いはけなき窓の若竹起ふしもまた白露の片なひきして
ぬけ出ん一ふしもかないはけなく見し竹の子の窓をおほへる

卯花

神まつる時は來にけり卯の花の白ゆふかゝるかつらき山
卯の花のまかきを雪のふる巢かど老鶯の籠りてそなく

夜卯花

卯の花の月のさかりとなりしより黒木のませの夕闇もなし
うつきさく賤かふせやの袖垣に重ねて白き夕月夜かな

月前卯花

咲そめて枝さへたわむ卯の花の雪をれすなど氣つかはれつゝ

卯花如波

しら川の關によせ來て越もせず返らぬ波やさける卯の花

里卯花

卯月の末つかたいと寒かりしかは火桶をかきなてゝ

ゆふ月の影は目なれし白川の里わく色やうつきなるらむ

葵

すみのいろに夏も霞める煙かな火桶のほたや櫻ならまし
世々かけてけふのみあれに葵草昔なからの二葉なりけり
天つ日の影さす方にうちなひく葵や神のかさしなるらん
千世へてもなほ二葉なるあふひ草いさやかさして老をかくさむ

待杜鵑

ほとゝきす待初しより夜比へて鶏か音きかぬ曉もなし
鶯のかへる山路のほとゝきすわか言つてをいかに聞けむ

杜鵑

つれなしとさのみはいはし時鳥たのめて訪ぬ人もある世に
かた岡の森のしづくにぬれながら聞かてはいかに山ほとゝきす
まてはこそあやなき闇も一聲の行へも見ゆれ山ほとゝきす
時鳥いかてと思ふ今宵しも名のり出たるむらさめの空
いたつらに花桶をかをらせて我門すくるほとゝきすかな

人傳 杜鵑
杜鵑 數聲
曉 杜鵑

朝 杜鵑
夕 杜鵑

夜 杜鵑
月前 杜鵑
雲間 杜鵑
岡 杜鵑

郭公聲の跡たに見てましを有明の月は雲かくれけり
朝ほらけ思はぬ餘所の人つてをきくもうらめし山ほとゝきす
をちかへりけふも啼なりほとゝきす待し夜比の數はものは
ほとゝきす有明かたのしのひ音をたかきぬ／＼にかけて鳴らん
曉のかけの八聲にさそはれて名のるまくらの山ほとゝきす
宵の雨に空たのめせしほとゝきす今有明の月になくなり
朝ほらけたかきぬ／＼に杜鵑なみたそへてやなきわたるらむ
一聲の行へやいつこ三日月のほのめくにしの山ほとゝきす
ほとゝきす夜離せんとや一聲に夕まとはしていつちゆくらむ
空たきもしめりかちなる雨の夜も鳴音さわらぬほとゝきす哉
月にこそ名のりてすくれほとゝきす天つ少女やそらにきくらむ
行合の雲のひまもるほとゝきす月の桂の枝になくならむ
朝日てるさたの岡へのほとゝきす昔の跡をこひてなくらん

野 杜鵑
浦 杜鵑
市 杜鵑
社頭 杜鵑
聞 杜鵑
名所 杜鵑
杜鵑 稀
早 苗
夕 早 苗
曉 早 苗
雨中 早 苗

大江山夜半にやこわしほとゝきす鳴ていく野のちかつきの聲
波枕いねすかたらへほとゝきす月も明石のうらくはし夜そ
杜鵑たかきくてうる初音ともしらてやさわく市の商人
住の江のまつとせしまに片そきのちきり遠へすなく杜鵑
ほとゝきすきく嬉しさを汝にしも人傳ならてしらせてしかな
こしかひの有馬の山のほとゝきす湯浴しかてらけふもきくかな
色ならは稀なる聲をほとゝきす移してたにも慰まゝしを
ふしたつと急き／＼て露の間に竹田の早苗うゑ渡すなり
時來ぬといはひて植る千町田の早苗や人のいのちなるらむ
山川の水せきいれてとり／＼にいそくは民のさなへなりけり
夕月夜にはふ門田の水口をかきにこしてもとる早苗かな
有明の月のかけをもかきにこし賤か門田に早苗とるなり
真袖こそこひちにぬれぬ植女らか出歌は雨にしめらさりけり

菖蒲

競馬

棟前

窓前

紫陽花

橘薫枕

夜橘

月橘

雨後

古都

橘

池殿のめぐりのあやめ生出て小簾にかゝれる露かをるなり
 長き根を糸にひきなはあやめする夏の衣をぬはせてしかな
 あやめ草根なから糸にひきはへてかどりを縫は涼しからまし
 乗こわてしるしの木蔭過ぬらん埒のつゝみの音とよむなり
 紫のくもこそかゝれさみたれのをりにあふちの花咲しより
 雨すきしまとの夕日の薄にほひそものあふち風わたるらし
 人ならば誰かたのまんあちさゐの花はきのふに色かはりゆく
 思ひ寐の昔の夢のなこりより枕にかをる軒のたちはな
 村雨にはなたち花のかをる夜は軒のしづくもかそへられつゝ
 五月開花たちはなのかをる夜はあやめもしらす昔こひしき
 橘のむかしをどへは我袖にこたへぬ月のかけかをるなり
 雨すきしあしたの庭にこほれけり夢にかほりし立花の露
 立花の香にそむかしの忍はれぬ松はふりにし志賀の古里

五月雨

五月雨久

山家梅雨

浦五月雨

閑居五月雨

橋五月雨

梅雨晴

水鶏

夕水鶏

水鶏

水鶏

夕水鶏

夕水鶏

たれこみていふせささる五月雨にうけらたく家を思ひやらるゝ
 おもたけに木末たわみて梅林うみはつれとも晴れぬあめかな
 いつこにか清水もどめん山の井も寛もにこるさみたれのころ
 藻汐くむ苦屋のあまもうみ果ん芋生の浦わの五月雨の頃
 にはたつみあふれ流るゝ五月雨に岩ねの水は濁らさりけり
 夜もすからをやみもやらて朝むつの橋もどろゝに梅雨そふる
 かき籠る蠶屋の軒端の糸水に朝日かゝりて雨はれにけり
 五月雨の雲のまき山晴そめておもはぬ瀧の敷をみるかな
 あやめふく軒のしづくをかきりにて空もみどりに雨晴れにけり
 晴やらぬなかめの空と思ひしに蟬さへなきて夕日さすなり
 横の戸は月のさすかにまかせても水鶏鳴夜は寐られさりけり
 あはれにも宿を定めぬ水鶏かな宵曉と來てはとふらむ
 はかられて誰夕月にうかるらむありか定めすたゝく水鶏に

曉水鶏
旅泊水鶏
夏月

夏月涼

夏月逐涼

竹間夏月

夏月似秋

岡夏月

河夏月

水上夏月

水邊夏月

折しもあれ水鶏そたゝく妹か門今きぬくのあかつきの空
浪をいたみはてし小舟の夕まどをなくさめかほにとふ水鶏かな
端居してすゝみの袖に待とらんかつらのしつく月のをち水
はしゐしてまつとせし間に小夜ふけて月にぬれたるさし扇かな
松風もすゝしの袖にまちどりてよひくならず月のかけかな
涼しさにひさこもとらす飛鳥井のみもひに宿る月を見るかな
若竹のまたふしなれぬ露の間にやどりてしらの短夜の月
ゆふ露にまかきの虫も鳴ぬへき秋をよもほす月のいろかな
はし居して見るほどもなし水莖の岡になかるゝみしか夜の月
かつら川瀬々の白糸よりかけて涼しき月をしはしどゝめん
水鶏なく川せの月の影ふみてから渡りする袖のすゝしき
ひさこもてすくへどもれぬ飛鳥井のみもひに宿る夏の夜の月
青柳の下ゆく水にかけ見わて月も涼しくなひく夜半哉

池夏月

浦夏月

樹蔭夏月

晩夏月

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

水そこの玉藻に月のかけとめて池の心も涼しかるらむ
涼しさに魚もうかれて踊るらん月をたゝふる宿のいけ水
すゝしくも浮ふ鴨女の聲なから月かけひたす袖のうら波
風なくは桐の廣葉につゝまれてかけはもらまし夏の夜の月
檜の葉の葉守の神も涼しさに月のもるをは咎めさるらむ
秋ちかき鹿のうは毛の星かはり空にほのめく有明の月
賤か家の垣ねはくれて夕顔の時めく露や螢なるらむ
光をは月にけたれんやさしさに闇を我世と螢とふらむ
まど近くきわて螢のゆく見ればあつめし時やくるしかりけん
身をかへてはたるとならは玉たれのうち赦されて我もいらまし
川つたひなほ狩ゆかん籠の内にいれし螢よみちしるへせよ
更ゆけはすかる螢の數そひて露重けなる庭の玉笹
流れ來し雨夜の星と見るほどに軒はつたひてとふ螢かな

叢中螢
螢照叢
行路螢
水邊螢

水邊聚螢

湖上螢
淵底螢

鵜川

草むらの露かきわけてうなららるか拾へる玉は螢なりけり
人とはぬむくらの庭に玉しきて照らす螢よたれを待らん
水鶏来てよしたくとも玉鉾の行手の螢柳はなるな
天の川星のあゆくと見わつるは水くきにすたく螢なりけり
岩波のたきつ思ひをけたんとて山した水に螢とふなり
すみた川わたりを遠み船まては風にのりてもゆく螢かな
ゆく水のそこにもつとふ影見わて螢かすそふ岸の青柳
近江の海やかぬ瀬津のゆふなきにひとりこかれてとふ螢かな
人しらの谷ふどころの水底にもゆる螢よなにしのふらむ
晴るゝ夜の星かけならて谷ふかくしつく光は螢なりけり
かつら人月をいどひて世渡りの鵜川の闇を寝てやまつらむ
後の世の闇は物かは鵜飼人くらき瀬毎にかゝりさすらむ
長良川いく瀬きほひて下すらんつかふ鵜繩の長からぬ夜に

鵜船
撫子

撫子露

夕顔

夕顔

百合

夏草
夏菊

島の鳥鵜舟の手繩みしか夜にいく瀬かゝりをさしくたすらむ
船きほひさすやかゝりの數そひて鵜川に残る夕闇もなし
種しあればさゝれ押わけ咲にけり照日のくまの川原なてしこ
撫子の花におきそふゆふ露にまじるは妹が涙なりけり
からあやもこれにはしかしうるはしき大和錦のなてしこの花
おく露やおほし立けんちり塚のから撫子は親なしにして
賤か家の軒端に白き夕顔の時めく花はたれをまつらん
夕顔の露にゑみぬる花見ればあやしき賤が雛ともなし
あはれたか嫁かねにせん咲しより風にも見せぬ姫百合の花
袖ふれはやさしからましょもなけにふしめかちなる草ふかの百合
少女等かまりつく庭のさゆり花露のゑまひもふしめかちなり
ふしの根の雪を奪ひて水無月のてる日に匂ふ白菊の花
夏ふかき野中ふる道草わけてふす猪の夢は誰かさまさん

夏 草 深
野 夏 草
蚊 遣 火
蓮
雨 中 蓮
雨 後 蓮
池 滿 蓮
水 蓮 池 室

茂るどもかりな拂ひそ村す、き君來ましなは御馬くさにせん
妹どわかあひねの濱のかきからの塚さへ見ねすしける夏くさ
きのふかも雀かくれに見し野邊の鹿も伏へくしける草かな
しけり合ひて風もかよはぬ薄原されはよ道もわかすなるらむ
蚊の聲は軒にあふれて伏庵をけふりにつゝむ夏の夕くれ
色も香も清き蓮の花をなと佛のものどたれかなしけん
西寺の池のはちすの花におく露や佛のゑまひならまし
大方のはすの立葉はかたふきて雨こそ花の數を見せけれ
花のため笠ともならて村雨にさしかたふかぬ蓮葉もなし
雨すきし蓮の上のたまり水玉ゆりわけて風わたるなり
魚をさる垣つの池の花はちす涼しき露のちらぬ間もなし
みさひるる池を廣葉につゝませて清くもかをる花蓮かな
折ふしのさかひも知らぬ氷室守おものたつ日や夏としるらむ

朝 氷 室
夕 立
里 夕 立
野 夕 立
名 所 夕 立
行 路 夕 立
夕 立 晴
蟬

ひむろ山涼しき松の朝風もつゝみて君にさゝけてしかな
まゆなせる遠の雲井に鳴神のみさき追ふらし雨こほれきぬ
夕立の名残すゝしき檜の葉にぬれて入日の影なひくくなり
夕立はまたゝくうちに門過ぎぬ神の聲のみ空に残りて
夕立は里の中はし限りにて片にこりせり野路の川そひ
神なりて雲のこねゆく虎か峯夕立すらし十津川の里
おりたちて野中の清水結ふ間に夕立早み薄にこりせり
はたゝ神聲いかるかの里すきてとみの小川に夕立のふる
夕立は鈴鹿の山をふり捨てあのゝ松原今わたるなり
なる神の音ひゝくなり夕立の車宿りにしはし息はん
夕立は外山の松を過にけり涼しき風を袖に残して
我宿の桐の一葉に鳴そめて外山につゝく蟬の聲かな
木末より夏をゆすりてなく蟬の聲にちり來る森の下露

雨 後 蟬
瀧 上 蟬
山 路 蟬
樹 上 蟬

晚 夏 蟬

扇 閨 扇
扇 風 秋 近 扇
松 風 忘 扇
松 風 通 秋
泉

四〇
岡こねの松の一むら雨過ぎてこほる、蟬の聲のすゝしさ
岩はしる瀧のひゞきに争ひて梢をゆるする蟬のもろ聲
深山路や苔むす楨の青葉をも鳴枯すへくとよむ蟬哉
蟬さへも千枝にみたれて思ふことしのたの森のくすに鳴らん
吾妹子にあふちの花よ散にしをなほ空蟬のこかれてや鳴く
鳴そむる門のかつらの一聲を外山にかけてとよむ蟬かな
うつせみのあすの命やいかならん秋もとなりの松になくなり
はしゐして月をも招くあふき哉涼しき風を間使にして
手もすまにならす扇の風なくは寝やの暑をいつちやらまし
捨られて秋にあふきの我そともしらて風をはなほ招くらむ
風まつと松にかけたるさし扇暑さと共に忘れぬるかな
琴の音に涼しく通ふ松風は秋のしらへにまたき吹らむ
苔ふみており立松のした清水こゝと岩根に音ひゞくなり

對 夜 對 泉 水
終 日 向 泉
水 音 幽
松 下 泉

祈 雨
夏 風

松 下 風
涼 風

落たきつ夏も流るゝ水の音は結はて見るも涼しかりけり
庭の面の瀧の糸水うちはへてよるも結へとひゞく涼しさ
こゝろゆく水の音かな夏しらぬ此松かけにけふもくらさん
かすかなる水の音かなかの見ゆる杉立奥は瀧にかあるらん
すゝみすとたか駒どめし跡ならん松の下水うす濁りせり
玉の緒も結ふ清水ののひぬらん千世松風の袖にふくなり
結ふ手のしづくに誰か濁しけんしはしすむ間を松の下水
夏しらぬ山松かけの苔清水ひむろの外のこほりなりけり
黒駒のみてくらまたて天つ水せき落しませ川上の神
立よれば汗にぬれたる夏衣またきにかわく松の下風
有明の影ふむ野路の淺ち原露ひやゝかに朝風そふく
夏の風うすき衣につゝまればあつしとかこつ人に送らん
あなすゝし袖につゝまんよしもかな身の守りともならの下風

苦熱
納涼

夕納涼

水郷納涼

海邊納涼

船納涼

水殿夜涼

水檻風涼

竹風涼

物かけに晝は風をも待にしを夜はの暑さそさけ所なき
しるしらぬ人もとひ来て走り出の柳のものは涼しかりけり
ところ得て手飼の犬も眠るなりすゝみの床は廣からねども
涼しさはゆふ川そひの掛つくり秋をかけてや風もふくらむ
湯浴してかふるすゝしの袖輕し風心地よし夕ありきせむ
小石ゆく水の音たに涼しきにゆふ風わたる川そひのやと
ともし火の水に移りて川そひの里は涼しくゆふ風のふく
おりたては暑さはいつか忘れ貝ひろふもすゝし住の江の濱
けふもまた夏放れ洲に船よせてすゝみかてらに夕魚釣らまし
波の上に夏を放れて船させは夜汐すゝしく追風そふく
せきいるゝ川水なからわた殿のしたにいさよふ夏の夜の月
魚をとる瀬の音も清きおはしまにぬれてかよへる風の涼しさ
窓近く我うゑる竹の生茂り夜毎涼しく風わたるなり

曝書
晚夏

晚夏
螢

夏秋
萩

夏長
日

夏曉

夏朝

夏夕

夏雲

山家
夏

紙魚のすむところやいつこ夏の日にふみ分られてゐる隈もなし
夏もはやひとよはかりの芦籬秋をかけてやゆふ風のふく
おきあまる露をし見れば芦垣のひとへや秋の隔なるらむ
くみあけて夏を流せる水車涼しき秋やめくり來ぬらむ
物いはゝいかにかこたん露よりも光うするゝ夏むしのかけ
ゆふしてもなひきて涼し身濰川河瀬の神の人やうけひく
姫百合はあつさに堪すかたふきてまつ夕露の間遠なるらむ
夏麻ひく少女はうみて長き日にしはし晝ねの夢結ふなり
短夜の月は淺ちに影おちてしらむも涼ししのゝめの空
蓮さく池のつゝみの朝ほらけ袖に玉ちる風のすゝしさ
かはほりのどひかふ夏の夕月夜雨近けにもうす曇りせり
水無月の日てりつゝきの空の雲あはたつ見れば雨近けなり
時鳥世に出しより人とはぬ松のどほそはあけてこそすめ

雨後夏山
夏 河
夏 海
夏 眺望

海水浴
夏 里
夏 居 所

夏 節 寺
夏 折 事

四四

雨すきて涼しき松の嵐山千とせのかけは夏なかりけり
大井川わくひにねふる白鷺のみの毛涼しく夕風そふく
夕立の雲をゑかきてうす墨に波のほそむる筆の海つら
目にうかふもの皆あつきいそ鳥の夏を洗ひてよする波かな
松浦かたゆふ波すゝしもの山風なから秋やよるらむ
ゆふ立は關路すきしを清見かた尙風さわく三保のうら松
いつしかと身の病さへ忘れ貝拾ふもたのしうしは浴つゝ
卯の花の垣根つゝきの月見れば桂の里は夕闇もなし
けふもまた隣にあまる真清水をせき入れて夏を流しつるかな
歸り來て老鶯もかたらへはひとりはずまぬ山のおくかな
高野山夏はこもらぬ岩室を照すは法の光なりけり
大みたけさしも尊くはかるらむよをりの竹の千世の例に
ふし立つと急きやすらんひき繭にかへて少女も早苗とるなり

夏 鳥
夏 興
夏 簾
夏 筵
夏 器
夏 風 雜

秋

立 秋
立 風

夏引の手引の糸をひきうみて少女もしはし夢結ふらむ
まゆを煮る湯けは物かはたゝら立鍛冶は夏も真鐵ねるなり
門たゝく水鶏はたわて短夜のおけぬと竹に雀なくなり
ひさこもて清水は汲みつ風つゝむ袋もかもな負ひて遊はん
心してまはらにあめる篠すたれしのに涼しき風かよふなり
ならの葉のそよくも涼し笹むしろ夏は木かけにしくものそなき
そよ／＼と晝寢の夢も結ふへくうつはの風の心地よきかな
犬さへもところ得かほにねふるかな涼しき松の木かけもどめて

四五

初秋風 初秋夜 初秋雨 初秋虫 都初秋 新秋月 幽栖秋來 殘秋暑 暑

蜻蛉とふ小野の芝生の夕日かけ秋の姿を見そめつるかな
 ゆふ露もいまた結はぬ袖の上にかろくもたつか秋のはつ風
 秋風もほにあらはれてさやくなり門田の稻葉軒の下萩
 ともし火もまたく小籬の内かけて吹入る秋の風の涼しさ
 ぬれてふく朝風すくし村雨にもよふされてや秋も來ぬらむ
 尋ねても聞んと思ふ虫の音をさそひ出たる夕月夜かな
 萩原は音こそたてね葉かくれにしたなく虫や秋をしるらむ
 いつの間に秋は來にけん薄原まつほのめきて虫もなくなり
 都人をきの葉風もきかぬ間にたつかあきつの大路とひかふ
 秋はけに西の空より立ぬらん三日月見れば薄紅葉せり
 人とはぬわか蓬生のきりくすしたなく聲に秋をしるかな
 秋たつと風は告しをなをもかくあつさは夏にかはらさるらむ
 みそきしてはや一月は流れしをあつさは猶も世に淀むらむ

七夕興 七夕祭 靈 萩風驚夢 萩前萩 月居萩 閑居萩 古郷萩 名所萩 萩

秋はまた名のみ立らんから衣ぬれにし汗のかわく間もなし
 天の川星のあふせはしらねともさ渡る雲や波のうきはし
 たなはたの枕ゆふへの玉小菅七ふにあみて我もまきねん
 玉まつる數の燈火かゝけても隱世までは照らさるらむ
 なき人の玉やかへりて宿るらんけさは置そふ蓮葉の露
 ふく度にあはれもそひて秋風の音まさりゆく庭のをき原
 萩の葉におどろかされて中絶し夢のうき橋風わたるなり
 月見つゝ友まつ風の音にしも何さやくらん庭の萩はら
 あすはとくむくらの垣に結添ん夢やすからぬ軒の下をき
 かたばかり残るまかきの秋風にどころ得かほの萩のさやきや
 神風やいせの濱萩折しきて秋たつ波の音をきくかな
 咲ぬ間は露やすからす見し萩のさかりはよそふ玉とこそなれ
 しかはかり名たてやつらき萩の花露のぬれ衣かわく間もなし

萩 映 水 萩 露 萩 萩 萩 萩
 萩 映 水 萩 露 萩 萩 萩 萩
 朝 閑 月 薄 野 幽 水 萩 苔 萩
 居 下 栖 邊 露 萩 萩 萩 萩
 顔 薄 薄 萩 萩 萩 萩 萩

白糸をむらこに染めてあき萩の錦をさらす布引の瀧
 露なからしかまし物を宮城野の萩さく野邊の苔のさむしろ
 手にふれは亂れやせまし秋萩の露をは風もよきてふかなむ
 布引の瀧の白糸わくらはに錦織いたす秋はきの花
 きりくすまた聲細き蓬生にましりて匂ふ糸はきの花
 妹か髪あけ笹葉のあき風にみたれて匂ふいと萩のはな
 花すゝきはにあらはれて招けとも夕は風もどまらさるらむ
 花すゝき袖せはけれと久方の月の影さへまねきいつらん
 秋はまた我かくれ家はしられしを穗に出てまねく初尾花かな
 朝かほのさかりは露も心しておきまされはやゑまひこほるゝ
 物いはゝきのふ敷へし蕾よりおほしと問はん朝かほの花
 かりそめの折かけ垣と思ひしを咲てつくるふ朝かほのはな
 日影まつあしたおもなみ葉かくれの露に伏たる朝顔のはな

女郎花

過にし方戀しきといふ題にて

草 花
 朝 草 花
 露 花
 相 撲
 稻 妻

立こむる霧のまかきの朝顔は露のひる間も久しからまし
 葉かくれをなほ露の間の命にてのころもあはれ朝顔の花
 きぬくの露のかすそふ袖垣に咲こほれたる朝顔の花
 尾花にはいつ契りてか女郎花まねけはなひく妻と見ゆらむ
 きひには見ゆる物から女郎花あたの大野に一人たつらん
 女郎花しめゆふ野邊の露わけし袂のくたち今もかわかす
 あやめすゑ錦やおらん機はりの廣野に匂ふいと萩の花
 鳥狩すと野邊の八千草わけ行けは袖に重れる花の朝露
 やすからぬわか袖のみか心なき草の袂もつゆの夕くれ
 手力もなげにかほそき益良雄やかちて抜出のかすに入らん
 汐うちてちから足ふむふり見ても是そ抜出の最手には有らん
 いなつまのしはしほのめく影はかりはかなき物はあらしどそおもふ

始聞虫
月前虫

夕虫
夜虫

深夜虫

露底虫

促織

五〇

稻妻の夜道をてらす影のみそはかなき物の尙たのみある
ねさめしてきけは枕のした鳴にまたどのはぬ虫の聲かな
浅ち原こほれぬ露もなかりけり月さへゆらく鈴むしの音に
秋風の夜さむをわひていそくらん月にくたまはたおりの聲
野や月にひきてはし鷹の尾花の袖に鈴虫のなく
桐の葉の落そめしより虫の音に袖をぬらさぬ夕くれもなし
ふけぬるか月は軒端に傾きてまくらに高し松むしの聲
いかならん枕の下になく虫のなみたはそてのうへにちるらむ
小夜深みむくらの庭の虫の音を空にさそひて秋風そふく
おく露や霜となるらん松むしの鳴音も寒く小夜更にけり
月かけにゆらくも清し鈴むしの聲にこほる草むらのつゆ
こかしここほる虫の聲ながら庭に玉しく浅ちふのつゆ
きりくそ夜もくたまはたおりの萩の錦もあすはおるらむ

虫聲所々

閑居虫

秋風

田上秋風

關秋風

野分

秋夕

里秋夕

秋夜

山路霧

こかしこうき世の秋をおのれとち慰めあひて虫のなくらむ
涙さへたくひて脆しきりくすなく浅ち生の庭のつゆ原
色もなきうき秋風の身にしむや餘所の哀も誘ひよるらむ
おく鹿火もしらむ山田の朝ほらけうき霧なひき秋風そふく
たひ人を尾花か袖にまねかせて逢阪こゆる關の秋風
はしたなく吹く野分かな靡きふす萩も尾花も折かへるまで
ゆくりなく小簾吹放ち半菀もうちやりぬへく野分たつなり
へたてゝも秋のあはれはこほれけり霧のまかきの夕くれの露
夕かけて萩のつゆふく秋風にわか涙さへどまらさるらむ
わひしけに鶉なくなり深草の里はさらても露の夕くれ
月もあらは見て明さまし菅の根のなかくの夜の慰そなき
山風になひけ秋きり先立し遠方人のそてふるも見む
晴やらぬ山路の霧のしつくかなさらても秋は袖のおもき

五一

古 渡 霧
小 鷹 狩
鳴 鶉
古 鶉 郷
雁 雁 來
始 聞 雁
聞 雁
月 前 雁
曉 雁
水 邊 雁 聲

夕きりに船路もわかす三輪か崎佐野の渡りやいつこなるらむ
八千くさの花ふみしたき小鷹入すりかり衣のふさはしきかな
あき風に門田の鳴子音ふけていをねぬ鳴やも、羽かくらむ
野分せし花野の草葉うら枯て伏とあらはに鶉なくなり
野となりし葎の宿をどひ見ればわれそ主と鶉なくなり
春さりておのれ作らぬ秋の田の色つく見ればかりくどなく
なきて来る雁のなみたの玉章は袖にはかけしよそに見るども
めつらしくきこね来るかな玉章も人傳ならぬ初雁の聲
はつ雁の聲する空の夕あらし秋は夜寒に早なりにけり
きりの海をどわたる雁の聲はかり袖に落くる夕闇のそら
天つ雁月によこさる聲なくは只一むらの雲と見てまし
敷たへのごよ出こし雁なれや曉寒く聲のきこゆる
初雁のこゑは汀にきこゆれど朝きり深しふしの川つら

海 上 雁
雁 行 寫 水
雁 成 文 字
月
月 始 昇
十四日夜月
月 映 水
明 月
明 月 照 水

秋風につらもみたれす文字なして雁渡るなり筆の海原
月かけによみつくさまし隈田川水に數かく雁の玉つさ
大澤の池のそこまで文字なして雲井をわたる雁のひとつら
いつ見てもかはらぬ月の影ながら秋は殊更てりまさるらむ
いく樂いく秋のみて神代より月人をどこ老せさるらむ
かゝみども玉ども見ねて鏡より玉より清き月の影かな
物おもふ人の心のくままでも見ゆるはかりの月のかけかな
夜からすのねくらの松に聲はして木末放るゝ月の影かな
宵の間は雲井に見ねし高山を踏しつめつゝ月立のほる
望にまた一夜足らねど影もよし夜よし月よし待宵の空
水にうつる月かけ見ればちりの世を我も放れてすむ心地せり
いつよりか今宵の月をめてつらむ満つればかくる習ひある世に
今宵はとみかき出たる月かけを水の鏡に照してを見る

秋 月 明
折にふれて
月下訪友
月 秋 友
月 不 撰 處
秋 情 有 月
月 前 秋 興
月 前 遠 情
暮 天 月
待 月
立 待 月
山 月

ひと、せの光を空にあつめてもいかてしまし月の今宵に
物は皆足はぬそよき望月の満ての後はかけぬものは
いて我も夜よしと今宵人とはんうかれ鴉も月になくなり
あらはには契らぬ月のしたひ來て夜な／＼庵にあひ宿りせり
ちり塚も玉のうてなも露はかりへたてす照らす月の影かな
妻こひてなく鹿よりも静かなる月の影こそあはれふかけれ
すむ月に秋のあはれやつくし琴音になく虫もうきをそふらむ
よしさらは夜の錦と言は、いへ紅葉手折て月にかさゝむ
千鳥より沖繩かけてゆくものは月にすみそふ心なりけり
少女等かかくろき髪を夕月夜さし櫛はかり見ゆる空かな
稻つまの人たのめなる影はかりをり／＼見わておそき月かな
しはしとてたゝすむ野邊にうち招く尾花も月を待夜なるらむ
わひしけに鹿も鳴くなりなくさまぬ姨捨山にてる月を見て

深 山 月
嶺 上 月
海 上 月
湊 上 月
艦 上 月
湖 月
江 上 月
瀧 中 月
水 中 月
都 中 月
社 頭 月

ましらなく檜原か奥の秋風にさきりなひきて月は出にけり
雲の上にとありと思ひし富士の根ものほれは月の麗なりけり
熊野の海をり／＼月のくもれるはかゝのむ魚の息吹ならまし
船はつる湊のまつに影さして波にほのめく夕月夜かな
仇浪のよるの守りと照すらん月もいくさの船かゝりして
近江の海そこまてみてる月影をみるめなしとは誰かいふらむ
うつら鳴く眞野の浦風秋ふけてさゝ波白くてる月夜かな
水そこに松を畫かきてすむ月の上に棹さす志賀のうら船
水の江や月そ今宵の玉くしけあけすもあらん常宵にして
玉つるきふるの瀧つ瀬神さひてあらまさかりの月にきらめく
水やそら空やはうつる水底にしつくは月の鏡なりけり
物の音もふけてしつまる都路の月にはかゝる塵ひちもなし
あけ部かけさしいりて幣殿のうちまてみてる秋の夜の月

野 亭 月
古 寺 月
古 郷 月
旅 宿 月
羈 中 月
松 間 月
鷗 浮 月
月 前 雲
月 前 猪
暮 秋 月
二 十 日 月
殘 月

月にこそ野守か庵はどふへけれ招く尾花もこゝろありけに
秋風に尾花か袖をなひかせて野守かいほに月を見るかな
ふる寺の門守る石の御佛のこけの袖にも宿る月かな
池はあれてすむたつきさへなき庭の葎に宿る露の月影
たひといへと草は結はぬ枕にもさすかに袖の月は露けし
たひ衣遠くきぬれど月影はなほふる里の山をいつらむ
わたかまる龍のすかたを庭の面に松の葉こしの月そゑかける
いさり火は沈むと見わし沖つ洲に月をうかへて鷗なくなり
ちりはかり立と見しまに雲の袖やかて月をも覆ひけるかな
かるもかき双ひふす猪の數までもさやかに見ゆる秋の夜の月
聲かれし鹿のうは毛の星はかりしらみて残る有明のつき
はつかなる月に向ふもあはれなりわか世もかくやふけぬと思へは
しらみゆくみ空に残る月見れば我世に似たる心地こそすれ

月 前 鳥
擣 衣
擣 衣
夜 擣 衣
里 擣 衣
稻 田
秋 田
秋 田 家

月夜よし夜よしとねくら放れ來てうかれ鴉も人まねやす
月にうつきぬたの音も更にけり誰か寢覺の袖しほらむ
打しきる音さへ寒く身にしむはいかなる色の衣なるらむ
いかにうつ妹か衣のいろならむ秋風ながら身にそしみぬる
賤の女か月の光も巻こめてうつかきぬたの音のさやけさ
きゝわひぬ嵐に雁に小男鹿に尙うちやまぬ夜きぬたの音
秋の夜の寢さめわひしく吹風に音たてそへて衣うつなり
いもか子は間なくこほれてから衣うつか糸鹿の里もどゝろに
とみ草の花さきにけり野分たつ風心せよ實を結ふまで
門田をは僧都にまかせ谷かけの晩稻守りて猪やらふらむ
秋の田のおしねかりほす里つゝき今年も民は足穂ならまし
晩稻かる日和よしとや皆いてゝ田ふせの門は守る犬もなし
賤か男か門に藁うつ音すなり貢のたわら月にあむらん

鹿 深 夜 鹿
 曉 鹿
 鹿 聲 幽 鹿
 峯 鹿
 田 家 鹿
 閑 居 鹿
 菊 盛 久
 菊 久 馥
 菊花第一

五八
 おのれのみ何佗しらに鳴ぬらんしかはかりなる秋にやはある
 くれぬめり松よりおろす鹿の音も時雨となりぬうつ中山
 更渡る嵐にたくふ鹿の音はいく里人のねさめどふらん
 夜きぬたにうちましりにし鹿の音は時雨となれり曉の空
 風のむたしかと鳴音は聞わねど涙はそてにありあけの月
 霧こめて鹿の立處は見わねども峯傳ひ鳴聲を落來る
 假庵もる袖のしつくとなりけり稻葉を渡る小男鹿の聲
 遁れこしうきは深山の奥にしも住はや鹿の音には啼くらん
 露をいつ結ひかへけん菊の花をれば亂るゝけさの初霜
 きくの花根さへといひし種なれや咲て久しき香に匂ふらん
 八千草の花のよはひを集めても菊一本にいかてしかまし
 百長に千秋五百秋にはふらむうつろふこともしら菊の花
 いさをさへ色さへ香さへよはひさへうへなしとさく花そこの花

觀 菊 宴
 菊 映 水
 籬 菊 露
 菊 露
 翫 菊 菊
 松 下 菊
 川 上 菊
 谷 菊
 禁 中 菊
 閑 居 菊
 菊花の圖に題す
 紅 葉

五九
 いつの間に千世の數さへめぐらむめて見る菊の露の玉うき
 白きくの花さきしより天の川水そこさらぬ星のかけかな
 目離せて千世まで見はや結そへし竹のまかきの白菊の花
 ひとゝせの花のどちめと菊のつゆくみてや老のよはひのひなん
 一本は老も手折てかさゝまし若ゆと菊の露はちることも
 つくしわた吾妹な着せそおのつから霜をおほへる松のした菊
 菊の香の流れてうかふ川上は世の長人の庵なるらむ
 霜しらぬ谷ふどころの菊の花秋得て後も久しからまし
 萬世もかさねて匂へ九重の庭に八重さくしら菊の花
 世放れし庵には植し菊の花千世を願ふと見られんもうし
 年月の流れゆく世を白菊や筆の林にさき匂ふらん
 ものは皆移ろふ末ははかなきを木々は錦のいろにいつらむ

尋紅葉 初紅葉 紅葉映日 林漸紅 紅葉未遍 夕紅葉 紅葉深淺 折山紅葉

六〇
 とこしへにみどり深むる青淵のそこまで照す岸の紅葉
 薄きりのまかきの山はまた淺ししくる、峯の雲わけて見む
 露しもにもよふされけむ諸共に妹脊の山は初紅葉せり
 山こゆる雁の涙やこほれけむ木未まはらに薄紅葉せり
 紅葉のちしほこかる、色見れば秋は夕日も照まさるらむ
 鳴のなく片山はやしけさ見ればはしの立枝そや、紅葉せる
 こゝろみに時雨のあめを山姫か初しほそめのうすもみちかな
 薄きりのまかきの山は晴れそめて夕日に匂ふ初紅葉かな
 秋ふかみちしほこかる、山の端に今一しほと夕日さすなり
 小男鹿の妻とふ山の薄紅葉聲の時雨や染めはしめけむ
 妻こひの聲の時雨のこければや鹿の脊山のちしほなるらむ
 雨すきし山はみながら紅にわかかへる手のいろにてるなり
 きのふよりけふは紅葉の色もよし移ろはぬ間に折てかさむ

社頭紅葉 名所紅葉 觀楓 葛雨 秋時雨 秋雲 秋霜 秋湖 秋池 秋川 秋水

六一
 立つ、く鳥居の色にあらそひて稻荷の山は紅葉しにけり
 露しものしわさならまし薄くこく染わけてけり二村の山
 常磐山松はつれなき露霜に色をかへてや秋を見すらむ
 三輪の山しるしの松もうま酒のいろに匂へるつた紅葉かな
 松かけのかくれ笠をも取あへす小雨にぬる、秋のやまふみ
 をり、に山めぐりしてふる雨に木々はいつしかいろかはりゆく
 ゆふ風に尾上をおろす村雨は妻とふ鹿の涙なるらん
 山松のやどり放る、秋のくも夜よしと月にうかれいつらむ
 けさ見れば霜にやさかむ女郎花秋よりさきにまたき移ろふ
 花す、きまねけど雁もわたり來ぬ眞野の入江の秋の夕くれ
 菊の花さけるを見れば大澤の池のそこまで秋はすみけり
 うちむれてす、みし加茂の川原風秋は身にしむ色にふくなり
 つるき太刀ふるの川水秋さひて霜のいろにもさわわたるなり

秋 晴

秋 地 儀

山 家 秋

秋 旅

秋 夢

秋 鳥

鐘 聲 送 秋 思

古 鄉 暮 秋 聲

古 鄉 暮 秋

菊のつゆ紅葉のしつくしたゝりて秋をふかむる山川の水
 晴わたる空にひとつらとふ雁の翅にかゝるちりたにもなし
 天つ空みどりにはるゝ秋の日は峯の紅葉も色まさりけり
 うすくこく時雨の露の染わけし錦をよそふ山ひめのそて
 やすからぬ風の音かな山里の紅葉もいまたそめあへぬ間に
 月におつる庭の笹栗音ふけてまくらの山にましら啼なり
 露わけて花すりにせん旅衣山路のまはき今盛りなり
 さぬる夜のかへにも袖をしほるかな虫の涙や床にちるらむ
 紅葉せぬ櫛の木むらのかけす鳥葉かくれにゐて物まねやす
 かきりなき秋の思ひをつくし来てまかきの虫も聲はかれけん
 紅葉ちる尾上の鐘にさそはれてあきは嵐のうへわたるなり
 捨らるゝ時にあふきの風の聲さむきや秋をかこつなるらむ
 かけ捨し年ふる軒の古すたれ風もどまらぬあきのくれかな

暮 秋 興
 暮 秋 雲
 暮 秋 田 家
 暮 秋 虫
 秋 不 留
 秋 の は て
 暮 秋 夕

風はおくり尾花はまねきゆく秋をなくさめ顔の夕けしきかな
 心なきくもの袖さへしくるゝは秋のわかれやそらもかなしき
 いなことふ外面の小田の落し水秋を誘ひて流れゆくらむ
 尾花ちる野邊にすたきし虫の音も残りすくなれる秋かな
 ほろゝとぬか子こほるゝ夕風に今はと秋もどまらざるらむ
 あすよりは秋はきのふとふる霜に匂へる菊の香にやしのはん
 くれてゆく片山紅葉ちりそめて夕日も薄く残る秋かな

冬

初 冬
 小 春
 時 雨

木枯のやどりととなりて落葉せぬ常磐の山も冬をしるらむ
 さねわたる此あかつきの鐘の音に霜をさそひて冬や來ぬらん
 かへりさく花も匂ひて神無月うすらに霞む空も長閑けし
 山めくる時雨にこはん紅葉のまた散残るかひもありやと

曉時雨
夕時雨
山家時雨
里時雨
落葉
夕紅葉
夜落葉
山落葉
落葉寒
落葉隨風

六四
村時雨すきかてにして物思ふ夜半の寢覺の夢ぬらすらむ
有明の月夜からすの聲寒ししくるゝ雲にぬれて鳴くらん
うき雲のゆくへにきわし村鴉しくるゝ森やねくらなるらむ
はら／＼と實さへこほれて椎か本けふも時雨るゝ山かけの庵
里の子か落椎ひろふ袖の上にこほるゝ音は時雨なりけり
嵐ふく神無月こそはかなけれ注連ゆふ森も紅葉ちりつゝ
紅に匂ふもみちの塵のみは遁れん山もなき世なりけり
葉ちるしくれの雲の衣手はゆふ日をしほる心地こそすれ
夕さらすにへさす鴟のはふきにもあへすこほるゝはし紅葉かな
おのつからちる紅葉の音にさへ寢覺かちなる夜半にもあるかな
妹脊山しくるゝ雲の眞袖よりしほるちしほは紅葉なりけり
むしふすまなこやか下にふしたれど紅葉ちる夜の風そ身にしむ
山風に木末放れて中空にしはし綾おるからにしきかな

落葉深
淵落葉
樵路落葉
紅葉留網代
殘菊

霜
枯野霜
古寺霜
橋上霜
樵路霜

はらへともつもる落葉にくれなるのちりの山をも庭になしけり
千鳥なく巴かふちはもみち葉のからくれなるの渦やまふらむ
山賤か重荷を負ひてふりうつむ落葉ふみわけ道たごるなり
吉野川ひをへてうかふもみち葉もつひのよる瀬や網代なるらむ
秋のいろはまかきの霜にやつれても香こそふりせぬ白菊の花
梅かをる春まで残れ菊のはな雪のきせわたきせて見るへく
冬の來て霜にもかれす翁くさうつろふいろもしら菊の花
霜結ふ竹のまかきのさくの花千世のかをりもうつろひにけり
枯尾花あきの色たに残らぬを霜こそむすへ袖のせはきに
高萱もをれてふす猪のかるもまた霜にかれ野の風さやくなり
ふる寺のかはらの松に霜さねてなくふくろふの聲もすさまじ
小夜中に鳴て渡りし野狐の霜に跡ある里の中はし
山賤かしもどゆふ手や寒からん眞柴に結ふけさのはつ霜

篠 木 枯 野 寒 草
 枯 野 風 草
 岡 寒 草
 松 下 寒 草
 寒 草 帶 霜
 江 枯 芦
 寒 松

六六
 柳川やくたす篠のつな手繩むすひ留たるけさのしもかな
 木からは紅葉のみかは色かへぬ松のすかたも安からぬかな
 ひたき鳴く枯野の原はいろもなしきのふ小萩に袖はすりしを
 人目さへかれゆく野邊の朝風に葛のうらみものこらさるらむ
 やさかみて霜に枯たる女郎花露にたはれし面かけもなし
 霜ふれは移ろひそめておのかしゝ色わかれゆく野邊の八千草
 ぬきかけし蛇の薄きぬもこよひて葛の枯葉に風さやくなり
 尾花こそ枯てもこの女郎花霜にふし見の野邊のさひしさ
 松むしは霜にかしけて水くきの岡の葛原來る人もなし
 かきりあれは千世松かけに綿きせて守りし菊も冬枯にけり
 かれてなほさやさし萩の聲をさへ結ひとめたるけさの霜かな
 夕しほのみちのどゝみにみたれけり霜のふる江のあしのむら立
 木からしになほ色かへぬ山松もたねぬ寒さを音にたつらむ

野 寒 松
 寒 樹
 寒 樹 風
 氷 始 結
 氷 結
 井 氷
 山 下 氷
 冬 残 月
 冬 残 月
 野 冬 月
 寒 山 月
 寒 月 照 霜

鴨なきて木からし寒き朝ほらけ繩手の松は霜さやくなり
 小男鹿のふしどあらはに冬かれてつか野の松は霜さやくなり
 楨の葉の霧のしつくもいつしかとたるひとなりて嵐ふくなり
 ひと村の松に嵐のあつまりてふけゆく夜はの音そ身にしむ
 玉もひにむすふ今宵のひもかゝみ誰打とけて夢を見るらむ
 水鳥の夢易からし寝ぬなはにかゝりて結ふ池のうすらひ
 あすかひのみもひに結ふ朝氷たかひさこもて打碎きけむ
 山かけの岩根の水のたはしりてたるひかゝらぬ草も木もなし
 をれふして袖も色なき枯尾花まねく霜夜の月の寒けさ
 眞砂路の霜に光をゆつり置いて空にしらめる有あけの月
 はし鷹のどや野のみすゝ霜さねて月にまふしはさす人もなし
 狼の聲ふきおろす山松のあらしの上にこほる月かな
 時守か霜夜の月の影ふみてうつかつゝみの音のさやけさ

寒鳥鳴月
千鳥

月前千鳥

曉千鳥

湖千鳥

島千鳥

聞千鳥

水千鳥

朝水鳥

池水鳥

霜さやくねくらや寒き村からす梢放れて月になくなり
神しまや磯間の千鳥渡わけて妻とあふきの濱つたひする
昔間よりあらはれ出て夕汐の入江にさわくむら千鳥かな
かけさゆる霜夜の月にをちかへりなくか千鳥の聲見ゆるまで
なく聲もちかく鳴海のうら千鳥あかつきかけて汐やみつらむ
小夜千鳥鳴渡るなり諏訪の海水のはしもあすやかゝらん
筆もかな足手なからにうつさまし繪島の千鳥月になくなり
きゝわひぬかたしく袖の浦千鳥夜たゞしはなく妻こひの聲
かるの池の玉藻のまくら夜嵐にふき放たれて鳴そなくなる
妹かりと生田の池のなひき藻に翅ならへてねふるをしかな
風さゆる霜のあしたや寒からむ波のうき巢に鴉鳥のなく
山かけはこほりにけらし夏箕川朝日さす方に鳴そなくなる
床しめしねぬなはかけてこほればや鳴音かたよる池のをし鳥

江水鳥

網代

網代嵐

霞

山霞

雪

雪朝訪友

曙雪

曉雪

朝雪

みどり野の池にすめはか冬來ても鳴の青羽は霜かれもせず
うちはらふをしの劔羽音さむし太刀つくり江に霜や置らん
今宵たれ千鳥なく音を身にしめて宇治の川門に網代守らん
千鳥なく川原の嵐霜ふけてかゝり火白し瀬々の網代木
夜嵐に音たてそへて楨の戸もうちやふるへくふる霰かな
月にさへなくさめ兼し更科やあられたはしる姨すての山
枯残るまかきの菊もうつもれて雪こそ花のどちめなりけれ
さねし嵐の末のひと時雨雪けのくもとなりけるかな
ふりなはと契りし友も松の雪けさはかゝりぬ我そとはまし
ほのくとなひく鷹尾の山かつらしらみそ渡る雪のあけほの
小鴉はまた夜をこむる岡の邊の松より白むゆきの曙
鶏か音にしらむと思ひしあかつきはふりつむ雪の光なりけり
遠近にたつる朝けのけふりのみ雪に限なすものはありけり

薄暮雪 月前雪 望雪 積雪 庭雪 遠山雪 海邊雪

村すゝめねくらの竹に聲はして雪にしらめる夕けふりかな
 月弓の稜威の道別に天の川いさこのみたれ雪とちるらむ
 おもど人今まかすらん玉すたれ秩父根白く雪のかゝれは
 野も山も皆うつもれて朝ほらけ煙のみこそ雪に立けれ
 筑波根も秩父も今朝は埋れていよ／＼高し雪のふしの根
 よしさらは雪にまかきも埋れよ隔てなしとて人のとふへく
 ふる雪に庭の竹むら打ふして世のかくれ家は顯はれにけり
 雪ふれは常に見さりし遠山の背向にたてる峯もさやけし
 まゆなせる遠の高嶺の白雪を我島山のうへに見るかな
 ものゝふのこしの太刀山遠白くぬけ出てこそ雪にたちけれ
 雪ふれは見さりし峯もぬけ出て雲につらぬく越の太刀山
 武藏野や時雨の末を見さくれは秩父根白し雪やふるらむ
 妹とわかきのふ拾ひしいそ貝のかたみの浦の雪を見るかな

孤島雪 山家雪 都雪 禁中雪 古渡雪 名所雪 暮村雪 羈中雪 馬上雪 車中雪

老人のおどろの髪を眞櫛もてかゝけたく島雪ふりにけり
 常世邊の浪路にかけて積るらむ雪にうかへる天のはし立
 鷺のすむ放れ小島のいはね松けさは雪こそ枝たわめけれ
 こりつみし年木も今は埋れ木となり果ぬへきけさの雪かな
 山かけや黒木の庵も白銀につくりかへたるけさのゆき哉
 めつらしく初雪ふれり内日さす都大路に山つくるまで
 浅くつもかくれぬ雪をふりはへて山つくらすと集ふみやつこ
 三輪か崎雪さへふりて日はくれぬ佐野のわたりに浮寝せよとや
 いつこにかねくらとるらん白鷺の鳥羽山松も雪に埋れり
 かきくらし夕のいろは埋れて雪にはれたる月の瀬のさと
 はらへとも積る小笠のみ雪かなさらてもとけぬ旅のこゝろを
 ゆくまゝに老たる駒にまかせなは雪ふる道もいかてなつまん
 時雨にはおろし／＼ほろを遠山の雪にかゝけてゆく車かな

雪中松

松か枝の雪のしつると見わたるは田鶴のねくらを出るなりけり

雪埋松 やかさつむ松のしら雪深けれと千世のすかたはかくれさりけり

吹上寺八景に北山暮雪を

夕時雨嵐となりてさね暮し北山しろく雪そつもれる

鷹狩 御狩野や吹雪にむかふあら鷹の鈴の音きほひ嵐ふくなり

狩場 嵐 是し鷹のをふさの鈴の音さわて嵐ふくなり御狩野の原

埋火 寒き夜は火桶はかりをかき撫て筆とる業もならはさりけり

火 雪をれの竹の夜床も埋火のあたりはさすかふしよかりけり

火 埋火も霜とさねゆく曉の寒さは寝てもおきどころもなし

炭竈 谷深くひそみし龍の昇るかど見しは炭やく煙なりけり

煙 山の奥もなりはひ安く炭かまの煙賑はふ君か御代かな

新袞 重ねてもなほ風さわてむし袞なこやかにしもねられさりけり

新嘗 豊御食をひらてにもりて天地の神をまつらすけふの新なめ

神樂

おのつから御火も白みて天の戸のあけ方近き朝くらのこゑ

里神樂 面白くゆすり上てもうたふかな朝倉かへし里もどろに

神樂及曉 霜の色に御火も白みて鶏がなく東遊ひはなほきほひつゝ

早梅 あたゝかに梅薫るなり紀の國のむろには冬もこもらさるらむ

隣早梅 春は早となり梅は咲にけり雪に籠るもしはしなるらむ

梅ふゝめり あたゝけき年の恵に雪とけてふゝみそめけりまどの梅か枝

雪中早梅 すゝみゆく世に後れしと梅の花雪のそこより匂ひ出たり

きふかも菊を終結と見し庭の雪をしのきて梅かをるなり

鶯は冬こもりする雪のうちにはひ出たる梅のはつ花

かをらすは誰かはしらん降る雪ともし色なる梅の初はな

かきくれし吹雪ははれて影さゆる月より白く梅かをるなり

梅か香に空たきそへて窓にさす霜夜の月をかすませてみん

霜くもり影日もうとき片山の冬をてらしてさく椿かな

冬花

雪中梅

寒月照梅花

水 仙
冬 鳥
山 家 冬
冬 眺 望
冬 山
冬 朝 日
冬 至
折にふれて
歳 暮

七四
きわのこる雪かどを見しひたきなく垣根に白き花の一もと
朝日さすかた山つはき霜どけの花にむれ来てひね鳥のなく
木枯はこからしどのみ思ひしを人目も草もかゝる庵かな
田鶴か音は雪にひゝきて雲はるゝ高根の松に朝日さすなり
むら雲に常はつゝめるつるき山さやにぬけ出て雪に立なり
風すさふ松はいろなき朝ほらけ枯野に目たつ霜はしらかな
霜どくる南おもての片ひさし薄き日影に猫そねふれる
みむなみの果をめぐれどあすよりはひまゆく駒も歸り來なまし
冬しらぬむろの郡にすみなれて薄き身とたに思はさりけり
なす事の數多ある身のいかてかは何人並に年のゆくらん
老の波よするなきさの月日貝拾ふともなく暮れし年かな
來經てゆく月日はかりとかそふ間に雪と積れる我よはひかな
世の中はあなうゝといひゝゝて今年もけふにけりにけるかな

學者惜年
歳 暮 雪
冬 祝
歳 暮 祝
春 近
魂 祭
衣 配
追 儼
除 夜
光陰如矢

七五
年くれて學ひのまとは戸さゝれぬ雪をあつめて文やよまゝし
かきくれし雪ふりはへて積らなんくれゆく年の道迷ふまで
年ありて賑はふ民のけふりより冬のみ空もかすむ御代かな
暮てゆく年のまうけの營ものどかなる代のめくみなりけり
言ほきの品のみつみて年の市もなけきはうらぬ君か御代哉
きのふよりけふはねひゆく梅の花近つく春の香さへそはれり
かへり來ぬ年のをはりの玉祭はかなきものゝかきりなるらむ
佐保姫のかすみの袖もたゝぬ間によそふも嬉しさくら山ふき
もゝの弓芦のやことにやはらはれて鬼はいつくに行んとやする
年は早今宵一夜とせまり來て身の怠りをかこつ間もなし
きのふとすきけふと來經つゝ年月のひまゆく駒はたちもとまらず

戀

戀 忍 聞 見 惜 待 祈 祈 契 臨 來
戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀
戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀
戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀

現にはあふよしもなし夢ならて結ふの神のゆるさゝらむ
山吹のいはぬ色香をたのみにてちり易けなる袖の露かな
物こしにきゝし言葉の身にしみて見ぬ面影の立そはるらん
玉たれの小簾のすけきに見し影のいつか心にかゝりそめけん
池水のいひさわかれて妹とわか名をし鳥の音にも鳴なり
夕うらも正しからすはかくはかり待あかさましあり明の月
ひとすちに逢瀬ありやと貴船川いくとせかけつ波の白ゆふ
片糸のあはぬ恨をともすればむすふの神にかけてけるかな
落たきつ行水はやき岩かねに苔むすまでも絶んどおもふな
かならずと頼めし物を玉たすきかけ違ひゆく人のこゝろか
たまゝにめぐり車の下すたれかけ放れてやいつちゆくらむ

逢 初 後 稀 別 切 思 互 思 思 厭 被 俄
戀 逢 朝 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀
戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀 戀

限りなくたのしき物のやさしきはどけてぬる夜の心なりけり
命をもあふにかへんと思ひしは今宵を知らぬ昔なりけり
あかすしておき別れにし袖の露くれを待まにきね返らまし
賤か女かおるしつ機の箒をあらみ間遠にのみもなれる中かな
花すゝき別れの袖に露ちりて招くもつらし返り見るまで
戀死ん命をたれにゆゝりおきてつれなき人のゆく末を見ん
おもひくさ生茂りては紅のなみたの露のかゝりぬる哉
思ふ人おもふといはゝ思ふ事おもはぬ中もおもひやるへく
秋風にとふしかくふす女郎花心ひとつをさためかねつゝ
忘れぬそのかね言の我耳に残るもつらき昔なりけり
なげきてもなほ餘りある我身かないとふにはゆる心つからに
我やうき人やはつらき白雲のいとほれてのみ世をやわたらん
たのみなき色としるゝ見るかうちに早變りゆくあちさゐの花

忘 戀
 悔 戀
 恨 戀
 絶 戀
 絶 後 戀
 絶 經 年 戀
 馴 戀
 隔 一 夜 戀
 隔 月 戀
 隱 戀
 占 戀
 思 貴 人 戀
 等 思 三 人 戀

いつ方にひきたかへけん小車のわすれし後は音つれもなし
 今更に悔のやちたひ悔しきは舊されし身の行へなりけり
 ます鏡見ぬめの浦に年をへし恨をまつは千船も、船
 末かけて契りし中はたねぬるを何玉の緒の世にのこるらむ
 中たわし久米の岩橋いはねともなほ心にはかゝるなりけり
 年ふれば野中の清水あせぬとやもとの心を汲む人のなき
 とけぬれば隔て心もなかりけりうちぬる中の夜半の下ひも
 ひと夜たにへたつも戀し夏衣薄くなりゆく初と思へは
 いつしかと問はぬ誰さをかそへつゝ早一月をへたてつるかな
 稻妻のかけ野の薄ほの見しをなと露の間にきわかへるらむ
 なかゝにまさしかりにし夕占もねたくなるまで小夜更にけり
 あなこひし天のうき橋命にも今はかゝると知らせてしかな
 國ひきのそのいにしへの綱もかな三つよりなから引やよせまし

旅 中 戀
 旅 泊 戀
 寢 覺 戀
 戀 憂 喜
 秘 戀
 人 妻 戀
 寄 劍 戀
 寄 衣 戀
 寄 商 人 戀

よなくの旅寢の空にかゝるとも妹はしらしな夢のうき橋
 今宵またしらぬ湊にうきねすと妹には告げよ八重のしほ風
 寢覺して袖ぬらせとやあふと見し夢路の末に時雨ふるなり
 夜の内にふたゝひ物を思ふ哉逢ふ嬉しさとかへるつらさと
 神垣の櫛にむすふ御注連繩我名は餘所にかけて語るな
 はかなしや主ある人にかけて帯の打解くへくもあらぬものから
 我戀は身を焼太刀のどにかくに胸はしり火のもねぬ日そなき
 紫のねもころ人の思はねは染てくやしき戀ころもかな
 あき人のしけき市路の八衢に聞うるはかり浮名立けり

雑

天 日

富士のねを十つゝ十を重ねても雲井は尙やはるけからまし
 赤根さす日のたてぬきに織る物は豊はた雲の錦なりけり

日出山
星雲風嵐
雨夜閑談
煙
夕庭煙
家煙
朝煙
晝煙
夕煙

八〇
岩戸あけて天の香久山出る日は神代も今もかはらざるらむ
雲はれて空にはのめく星の影枝折となして夜道ゆかまし
久方の天つみ空は廣けれど雲の袖にはつゝまれにけり
いろもなき科戸の風も折ふしの花に紅葉に染て吹くらむ
村鶉ねくらどめこし夕山の松をたわめてふくあらし哉
ふりし世の昔語りにつかさはいかに淋しき雨夜ならまし
薄けふり夕ある雲に立そひて遠山里はくれ急くなり
浦のあまも炭焼く賤も世渡りの外にはたてぬ煙なりけり
村からすねくらにいそく夕くれの煙にしつむ遠こちの山
いふせしと誰かはいとふ朝夕に御食を薪の煙と思へは
朝な／＼我たなこゝろ打つけに神の御稜威をまつ仰くなり
さく花のねふるを見れば中空に照日は今を盛なりけり
あらしひしねくらの鳥も静りて夕日うすつく山のはの松

山富士
富士
道暮林鳥
石瀧
那智瀧
山水の畫に題す
野水
橋

八二
物は皆うつり變れど山のみそ神代のまゝの姿なるらん
富士のねの雲晴るゝ日は久方の空のみどりも色まさりけり
天の下高さあらそふものなしとふしは煙も立すやなりけむ
ぬけ出て雲井に匂ふ花はちす神のしわざと佛らも見む
神代より開けそめにし敷島の道はいよ／＼さかぬゆくらむ
雲のほる外山のはやくれ初て雨よふ鳩のこねそさひしき
放れ石のおのかさま／＼立れども皆一かとはある世なりけり
さわわたる霜夜の月に聲立し千鳥の瀧は夏も寒けし
いかつちにならぬさへそひて天地をすゆるかどよむなちの大瀧
あふき見る那智の高山神なりて踏あたす雲は水沫なりけり
くら谷の奥を深めて遠近のけちめを見する墨の色かな
眞草かる荒野の原のたまり水鎌とく賤やかきにこしけん
跡をたに知る人もなし小墾田の板田のはしは名さへくちけん

巖 田 田 田 田 田 山 山 山 山 畑 草 僧 海 名
 家 家 家 家 家 家 家 家 家 家 庵 庵 庵 庵 庵
 雨 煙 燈 煙 煙 煙 煙 煙 煙 煙 雨 雨 雨 雨 濱

天地のそこひのきはみ築立し巖そ國の柱なるらん
 文字しらぬ田ふせの賤も横さにはふみも遠へす世を渡るなり
 蛙なく田中の庵のうはら垣ゆふへ淋しく小雨ふるなり
 ほどくゝに立る田ふせの煙にも豊なる世そ空にしらるゝ
 かゝけてもしめる田ふせの燈火を夏虫にさへけたれぬるかな
 のかれても花に紅葉に間はるゝはこゝも浮世の塵ひちの山
 眞柴たく煙も雲とかつなりて夕へをいそく山かけの庵
 山深みとなりへ通ふ道さへも八つ尾へたてゝすめるやと哉
 胡蝶とふあかたつゝきのすゝ菜畑黄金の色にとめる春かな
 さらてたに草のいほりは露けきに苔のむしろに雨そゝくなり
 雨そゝく草のいほりのつれくゝと昔をしのふ墨染のそて
 松浦の海はてこそなけれ棚ひける雲井の底や新羅なるらむ
 沖つ波白玉よせこ吾妹子か心なくさのはまつとにせむ

海 望 海 魚 島 屋 海 望 海
 路 遠 眺 氣 樓 望 帆 帆 路
 池 池 漁 島 屋 海 望 海
 水 浪 静 村 樓 望 帆 路
 古 郷 郷 泉 静 村 樓 望 帆 路
 古 郷 郷 泉 静 村 樓 望 帆 路
 家 城 郷 郷 泉 静 村 樓 望 帆 路

山は皆浪の穂の上に消にしをいつまで船をおくるあらしそ
 沖つ船眞帆に片帆になりにけり風の心そはかりしられぬ
 一帆見ねふた帆いり来て夕けしきみるめ敷そふ三津の浦舟
 沖遠く入日の末にあらはれて龍の都のかけ浮ふなり
 汐干には顯れ出て立れともみつれば沈む沖つ島山
 海人は皆苫屋放れてひく網のめさしや一人夕けたくらむ
 ひしくひの絶すあされと水廣き池のこゝろは濁らさりけり
 浪風のたゝぬを池のこゝろとは長閑なる世に住てこそしれ
 あみぬれは病いゆてふ白糸は絶すもわくにかゝるなりけり
 古里のむかしを忍ぶ草はかり荒にし軒に尙榮ねつゝ
 つはさほす驚はねふれと手もすまに楨の島人布晒すなり
 岩垣もかたくつれして古城門の松はかりこそ千世守りけれ
 なれぬれは隣間遠き一つ家も都にしらぬ樂みそある

新 閑 幽 隣 垣 殖 古 古 樵 古 窓 洋 菱 藻
 宅 居 水 聲 林 寺 夕 寺 路 埋 芭 蕉 花

家つくり古きを捨て移るともから人まねひ妻な忘れそ
 こと足らぬいほに朝夕あまれるは寛の水と落葉なりけり
 静かなる心ひとつにすまさは岩間の水も音うからまし
 いれ紐の同じ心のへたてなき隣りは垣もゆはてすまはや
 竹垣のゆひめまはらの庵ながら浮世は餘所に隔てそすむ
 槻の木はいやつき／＼に植つかは國の柱もなり出なまし
 高野山あかつき寒き鐘の音に誰か浮世の夢さますらん
 夕からすねくともむる木の間よりけふをどちむる山寺の鐘
 こけ衣いく重かけ／＼ん山かつか世わたる道の橋のたもとに
 涼しくも窓をおほひて茂るかな心はせをは風なくたきそ
 流れての世をも思はぬうき草のたよひなから花も咲けり
 水清き玉江におふる菱の實のかとある世とは人に知せん
 淀川の瀬にふす鯉やなひき藻のうつくし妻と放れかぬらん

石 濱 埋 松 海 浦 島 巖 社 竹 窓 緑
 松 綿 木 松 松 松 松 松 松 松 竹 竹 竹
 久 年 竹

常磐なるひかけの蔓千世かけてたねぬや神の恵なるらん
 船人のみさきの神に手向草いくへさくらん濱ゆふの花
 あらはれて花も咲なんいかし世に朽や果つへき谷のうもれ木
 天そゝる高嶺の松は久方の空のみどりの種やこほれし
 天のいろにかよへるのみか海原のみどりにつ／＼く橋立の松
 白鷺のやとる洲さきの岩根松友とや波の聲たてよる
 汐風の防ぎと植し浦の松木末にさわく波の音かな
 うつ汐の鳴門の音に大島の松の木末そこたへかほなる
 萬代も常磐にませと祝ふ哉岩根の松を言の葉にして
 瑞籬の久しき世より神さひぬいく代つもりの浦の老松
 ふしなくは竹もいかてか世に立ん人もならひて下折なせそ
 空しくて世を盡さめや友と見し窓の竹にもふしはありけり
 百しきのみかはの竹の深みとり天地のむた色はかはらし

杉 社 柿 鶴 晴 松 浦 鶴 鷄 鴉 朝 鳩
頭 杉 天 上 契 鶴 鶴 鷄 鴉
鳥

神さふるふるの社のいはひ杉幾世へぬらん苦むしにけり
うき寶造らん御代の物さねとほこ杉たゝぬ神垣もなし
眞神を根こしにこしと神代より常磐堅磐に榮ね行らん
秋深くなりけるかな山柿の實さへ紅葉のいろに出たる
人は皆白くなりゆくいゝたきを千代經んたつは紅にして
青雲に田鶴か音ひゝく朝ほらけ人の心も晴わたるらむ
村たつの聲する松は十かへりの花の物いふこゝちこそすれ
住の江のうら面白きたつか音に拾ふ貝をも忘れぬる哉
朝夕に千世をゆつるの聲きゝてすむも久しき松の下庵
あかつきのゆふつけ鳥の鳴音より關の門ゆるす逢坂の山
熊野山朝日さきおふ群鴉みちひき顔に今もなくなり
朝からすねくら放るゝ松見ればさながら關のちるかどそ思ふ
山鳩の聲も木深く霧こめて小雨ふるなり夕くれの空

鶴 鷄 鷗 鷺 飼 龍 虎 牛 馬 犬 猿 狼

常磐山八千代の椿つらゝと花をかそへてひよ鳥のなく
朝ほらけ鷺なく空のたな曇りやかて降來ん雨もよひせり
むろの江にうかふ鷗の波まくら夢路の關や小舟なるらん
岩崎の松をたわむる大鷺のはふきやさそふ沖つ白波
聲高くさへつる見れば籠になれてわれ鷺とおもはさるらむ
人のこと物いふ鳥は言靈の幸はふめくみいつか得にけん
しはしこそ淵にはひそめ時を得は顯れ出て雲にたつらむ
とらへ來て櫻さく野に飼馴し大御車をひかせてしかな
重荷おふ牛の力はしるけれどうなぬか手にもひかれけるかな
たゆみなくこゝろの駒にむちうたは嶮しき道もいかてなつまん
しるしらぬよへはかけ來て犬の子の尾をふるはかり可愛きはなし
ましらのみ何うとむへき猿よりさかしら人そ人眞似はする
大口の眞神妻よふ聲ふけて檜原のあらしものすこきかな

蟹 蝸 貝 蛇 巖 龜 豕 象 鼠 猫 狸 狐 熊

上

龜

牛

雪ふれはおのか毛色やはちぬらんうつろに熊の冬こもりせり
 きつねなく霜夜の月の影ふめは木枯寒し那須の篠原
 ふけ渡る時をかそへて腹つゝみうつか狸のおほる月夜に
 つゝみうつ狸すむてふ古寺に猫は目をもて時はかるらむ
 からねこの妻あらそひのひまを得てさわくもにくしよめの子ねすみ
 世の中に我に勝れる物なしと象はもの皆鼻てあしらふ
 もの食ふわいためしらぬ豕見ればこやいかり猪のまゝ子なるらむ
 龜の子の長閑けきさかそおのつから萬世ふへきしるしなるらん
 よろひ着て岩の上さらする龜は動かぬ御代の守なるらむ
 心さす誰ともならて此まゝにつひにくちなは口をしき身そ
 吾妹子か心なくさの濱つとになてしこ貝も拾ひてしかな
 家負ひて何處にかゆくかたつむりこゝも浮世そ竹のした道
 芦蟹は小船に似たり足手もて逆櫓こくとや横さらふらむ

賣 藥 煙 茶 煮 茶 酒 鮎 鯉 鯨 蟻 繭 蜘蛛

蛛

藥 草 室 茶

巢をかけて獲物まつなり笹かのにくり出す糸やしはる早繩
 吾妹子か造りあけたる手末の桑蠶のまゆは富もひくらむ
 重き荷を運ふ力のありてこそ遠く放れて餌をあさるなれ
 汐けふり二筋たてり其子ゐて女男の鯨や沖かよふらむ
 水無月の日てりをいたみ川淀にひれふる見れば雨こひやする
 山川のどこなめらかにさはしりてひれふる鮎のむつまじきかな
 いかなれば花のまどゐも雪見にも呑めは紅葉の色にいつらむ
 桐の尾のひしりのまきし種よりや木の芽は世にもかをりそめけん
 琴の音にかよふも床し木の芽に窓の内なる松風の聲
 松風の音こそひゝけ釜の湯のわきて静けきまど居なりけり
 ことなけにいひけつ舌の巻煙草胸のけふりも吹はらふらむ
 いく藥朝夕のまん月日こそ我玉の緒のはしはきれども
 さま／＼のいさを記せし藥さへ戀の病にきゝめなからん

皇 典
歌 硯 墨 筆 紙 筆 寫 人 心
金 銀 劍 太 弓 矢
刀

かしこしや神代なからの言の儘かきつたへたる皇みふみは
折々は世にあふかれん香くはしき言葉の花をさかせてし哉
うるはしき玉ならずとも朝夕に向ふ硯の海幸もかな
千世経ても色はかはらす藤代の松のけふりの香こそ高けれ
物いはぬ筆に任せて思ふまゝかきやるはかり樂しきはなし
からさまに漉返されて薄らかになれるは紙の力のみかは
ざる筆の心すさひの跡にこそ人の誠は残るなりけり
口なしの色に見ゆれと思ふ事はするものは黄金なりけり
ふしの根の雪の色なる白銀もつもれば國の寶なりけり
皇國の大みたからの一くさと仰くも高し村雲の太刀
つるきたちさしも名たゝるわさものも心にふらは何にかはせん
本末をとりなたかへそ梓弓世にかへし矢のありとこそきけ
武夫の矢にはく竹も一筋に直なるをこそひくへかりけれ

玉
髮 櫛 枕 碁 琴 笛 聞 管 眼 望
遠 鏡 鏡 絃 琴

光こそ世にあらはれねふたつなき我玉ありと人は知らしな
に向ひて昔をおもふ
ます鏡そむけは影も残らぬを何忍ふらん移りこし世を
肩すくる振わけ髪をいつの間に誰か妻櫛にかきあけにけん
かきなてゝさす妻櫛や手弱女かたけなる髪守なるらん
老ぬれば小枕にさへうとまれてうまいの夢は結ふ夜もなし
たし〜とけふも終日打つけにくれてもきはふ石の音かな
終夜ねよけにかよふつま琴は人の心をひくにかあるらん
すみわたる月にこちくの笛の音はたか松風に吹あはすらん
月にすむ琴の音きけは玉の緒も空にひかるゝ心地こそすれ
これやこの治る御代のもて遊ひうへ糸竹の音さへ静けし
これなくは何にうつして物を見ん目かねそ老の命なりける
國ひきの綱ならねども引よせて雲井を走る船も見すらむ

顯 微 鏡
 曉 鐘
 船 船
 浦 船
 商 買
 小 學 校
 卒 業 式
 習 字
 夜 學
 節 儉
 貯 蓄
 貯 金

目にふれぬ病のかひのすかたさへまさやかにこそ移し見せけれ
 高野山あらしの道をつたひ來て浮世にひく曉のかね
 朽てたにことなる音をもたてつるは之そみ國の浮寶なる
 松魚つり鯛つる浦のあま小船世をうみ渡る業としもなし
 山吹の露のみはねもなき物も言葉の花をそへて賣るなり
 假名は早かき覺わけん學ひやにから文字を讀む里のうなる子
 さのふまで難波津よみし里の子か横文字をさへ習ひをへけん
 怠らすふみならひなは濱千鳥雲井にかける羽もそはまし
 すきはひに晝はいとなき里の子も夜こそたどれふみのやちまた
 怠らす朝夕ひろへ塵たにも積らは山と仰かるゝ世そ
 塵をたにしてぬ心の根さしより黄金の山もやかて造らん
 たくはへて見れば光もますかゝみ黄金にまさる寶なからむ
 心なき岩木も物にふれてこそおのつからなる聲は立けれ

情 夢 日本魂
 赤心報國
 日本海海戦捷
 文 動
 洋 行
 送 別
 留 別
 歸 省
 旅 宿
 羈 中 眺望
 羈 中 山

草も木もむく榮ゆらん大御代の惠あまねき露の情に
 夢なからうつゝにかへすよしもかな蓬か島にわれそ遊ひし
 事しあらはある度毎に動く哉これそ國おもふ民のま心
 真心をみかゝさらめや湊川むかしの水をかゝみにはして
 大船の津島の海にあみはりてさやる鯨はとりつくしたり
 弓矢もて仇こそうたね國民をなつける筆のほこそ雄々しき
 そへてやる心さしをもともなは、風あらひやもつゝかなからむ
 露ふかき野山をわけて旅衣たつを見るにも袖はぬれけり
 忘れすはけふわかるとも春秋に雁とつはめに言つてはせよ
 家つとに何をつゝまん暇得てかへすもせはき夏の衣手
 知るしらぬ共に親しく旅のうさなくさめあひて宿る夜半哉
 あすもまたこね山路のあらましを夕の雲にかけて見るかな
 家の妹か待乳に似たる山もかなそをたに旅のなくさみにせむ

旅 泊
 旅 泊 波 静
 青 樓
 社 水
 社 頭
 王 將
 金 將
 金 將
 香 車
 角 行
 民 夫
 樵 人
 柴 人

梶どりはたひのあはれも白波にいかり沈めてうたふ船うた
 梶まくらしらぬ湊も君か代は夢路にさわく仇波もなし
 遊女にいつ心まで奪はれしあけやに張りしわなにかゝりて
 さにぬりの鳥居の数のつゝくかなこれや稻荷の神のみやしろ
 さまゝにねき事かけて結へともよるへの水はにこらさりけり
 ひとたひは都を出て時またん仇は間近く亂れ入りたり
 右ひたり近つく仇をふせく間に君をいつちに出まさしめむ
 横さゆく道しらぬこそうらみなれいむかふ仇は打はらへとも
 怒り猪の返り見はせぬ我ゆきそ妨けなせそ名なし奴等
 わか向ふなゝめの道をはや開け仇手にとりて今かへり來ん
 芦原は皆田になりてさやきなき御代の民草むく榮ねゆく
 朝夕になけきをのみはこらしとて重荷に花を折て添ふらん
 薄けふりたつきにそへて春秋の花も紅葉も市に賣るなり

海 人
 漁 夫
 釣 尼
 僧 俗
 還 女
 貧 匠
 番 業
 輕 翁
 老 人
 富 人
 親 友
 朋 友
 交 友

汐さるに船のり放ちあま少女玉藻かるらん島かけにして
 海さかに小船こきたみ七日まで歸らぬ海人の幸はいかにそ
 魚釣すと八重の潮路にこき出て辛き世渡るあま小舟かな
 西へとは心させとも雲水のゆくへ定めす世をわたるらむ
 墨染の袖のうら波立歸りまたうきめをやあまのかるらん
 海松の如わゝけし袖の狭ければ夜半に泣子を何につゝまむ
 書かきたる八尋の殿の形見ても心たくみの程そしらるゝ
 あなうかる業と肝をは冷させておのれ危ふき世を渡るなり
 年ふれは世の長人と人はいへと老ぬるはかり悲しきはなし
 とみぬれはなほ富ねかふ世の人の心のさかそ果なかりけれ
 諸共に身の怠りを諫めつゝみかきあふこそ友かゝみなれ
 思ふことかにもかくにも玉あへる眞實の友を世にはともしき
 むつましく語りあかして諸共に心のくまは残らさりけり

美 人
醉 美 人
美人向鏡
老 女 對 鏡
遊 女
妓 女
父 母
親 子
子 子
捨 子
男 子
婢 子

うるはしき露の白玉世に似ぬは竹より出し光なるらむ
眞盛りの花よりけなるすかた哉誰か奥床に移し植うらむ
ひとつきの露のなさけの亂れよりあたなるるみも溢れそむらん
影うつすまみの匂ひのます鏡國かたふけの花のいろかな
花のいろは移りにけりなどはかりに向ふ鏡の雪を見るらむ
あはれ世のうきには馴し浮船もよるへ定めぬ行へをやおもふ
夜もすから人の心をとらんとてうたひつ舞ひつこひを賣らむ
父母のめくみの露をしつたに報いてましを世にいましなは
起きふしにわか撫子の露の間もくたくは親の心なりけれ
數多あるも皆から悲し葦舟にのせてと思ふ子はなかりけり
捨てゆく母呼子鳥山彦はこたへもするをあはれその聲
きのふかも馬草かりにしあけまきのいつ世に出て男さひけん
みめもよし姿もいつかねひゆきてはしたに惜き花盛りかな

盲 啞 萬 白 隱 多 縣 市 郡 四 心 志 赤
士 額 知 長 海 兄 弟
出 納 事 長 弟
山 稅 議 員 弟
山 員 弟

世をてらす月日もしらす常闇の目しいは物を心にそみる
目には見て心にほりす物をたにこれと言はれぬ口をしの身や
嬉しさをつゝみかねてや萬代と立舞ふ袖をうちかへすらむ
すみ染の衣をきつと知らすして世すて人とや人のみるらん
君か代は都に出る人おほみとなり淋しくなれる山さど
山吹の花の光に時を得てあかたの蛙聲きほふなり
心して水ひきわけよあかた守すたく蛙のかしましの世そ
朝ゆふにたつ紅の塵みても市の司やいとなかるらん
あかたもる水のこゝろをくみかねて郡の司とけてねられす
四方の海皆はらからとむつひせん月日のみ影へたてやはある
見る目こそ花に紅葉に移るとも心のいろをかへんものは
こゝろさし只一すちになしてこそ千引の岩もひくへかりけれ
赤駒にかけし手綱もくれなるに匂ふつゝしの岡ゆくや誰

白 青 黒 黄 紫 東 西 南 北 寶 誠 謙 潔

白 遜 實

ふる雪に色はかよへど不知火の筑紫の綿は暖けなる
行水もみどり深めて松浦川きしの柳のかけなひくなり
熊野山炭やくけふり横きりて寝くらにかへる夕鴉かな
色香をは畑のすゝ菜にゆつるともいはて花ちる里の山吹
濃き淡きゆかりそおほき紫はなへての色司なりけり
ひんかしの空ほからかに赤根さし豊榮のほる日のみかけ哉
法師はあみた頼みて月の入る西に向ひて返り見もせぬ
天つ日は南のはてをめぐらんめくりをへなは返り來なまし
こさふくな蝦夷もむかしのねそならぬ治まるみ代に雲な起しそ
世の中の黄金は家のかさりなり眞實の寶子にしかめやも
まことある人の心は春秋の花に紅葉に移らさりけり
山をぬく力はあれどほこりに見ぬぬ心の奥そゆかしき
あはれ身は貧しけれともいさきよく洗ひ上たる心さしかな

仁 義 直 高 思 忍 欺 清 口 舌 鼻 目 耳

大海のひろきめぐみに草も木も露うるほはぬ物やなからむ
桃そのに三人ちきりし兄弟のかはらぬ物は眞實なりけり
武夫のふり起す弓にはく征矢の直なるをこそひくへかりけれ
大空の雲とやならん朝けふり家庭離れて立登るなり
人のみか風もころに思ひあれば物にふれてそ聲を立らん
身にあまる重荷負ふとも忍はましおろさん時のなからましやは
めやすしと人をあさむく古狐まつ毛濡して讀せさらまし
淵は瀬にかはる浮世に沈むとも心の水のいかて濁らむ
かけ言は虎狼にまさるへし門出ゆるすな口の關守
舌たみてさやにもわかす老人の昔語りにはこる見にくき
よきもあり悪きも交り門過る匂ひにや酔ふ鼻の關守
かきりなく晝は見るめの關守も夜目には夢の外は通はし
さどかりし耳も聞ねす老はれて世に疎まるゝ身こそなりける

臍 輕 重 長 短 大 小 多 少 浮 鐵 幼 銀
稚 園 橋 標 行

胸に火をたくはうけれど臍で茶を沸すと聞くそをかしかりける
國のためみ楯仕ふとますら雄か塵より軽く身をはなすらん
君か爲重き仇おふ大石は餘所目かろくも見ねよそふらん
浦のあまか千尋たく繩打はへて沖の霞の網にかへらむ
さめかてに結びもあへす短夜の夢のはしきるあかつきの鐘
天地の袋の口に吹入れて夏は涼しき風まくらせん
あくた火にむせて鳴蚊の落したるまつ毛の音は誰か聞らむ
釣ねたる海幸おほき海人小船濱せまきまで魚並へけり
野分して枝に少なき山柿を來てはあらそふ木の葉猿かな
たゆたふるうけを目あてに船避ん梶取直せ洲になかゝりそ
眞鐵もてかけ渡したる橋はしら千年ふるごも朽せさるらむ
その守かまめに育つる撫子にかゝるは嬉し涙なりけり
咲はちり散れば咲つゝ常とはに黄金の花の匂ふ宿かな

牛 牛 乳
指 肉 輪
音 器 計
時 人 力 車
月 夜 人 力 車
自 轉 車
汽 車
電 氣 燈
電 車
汽 船 煙
飛 行 機

絞らるゝ身はうしとしもかこたねと我乳呑子の瘦かみやせん
うまらにや御年の神の諾なひし今はうしとも言はぬあつ物
浮れ女かなけの情の色うると黄金のゆひわいくつさしたる
世にまさは親のみ聲もたくはへて跡とふ度にきかまし物を
東の間も世の怠りを許さしと時をうつはの音ひゝくなり
けふも亦人の車を待うけてわか世渡の道めくるなり
月清し燈火けちて小車のほろをかゝけよ夜道めくらむ
打のりてあかけはめくる小車も心のくさひさしてなりけり
うち乗りて汽車の窓より月見れは我こし方にあとすさりゆく
風ふけときわすかよへる稻妻や母屋の内外を照すともし火
君か世にいかて空手にをらしとて電さへも車ひくらむ
一すちの煙のそこに船見ねて笛のひゝきそ沖になりゆく
空渡るからくり見れば古への天のさくめか船は物かは

寫眞 政談演說 懇親會 園遊會 裁縫 密針 石鹼 債券 午砲 博覽會 新聞紙 進水式 屠牛

その人の額のほくろ顔の痣はらくろきまてうつる面かけ
おのか田へ水引んとて政事譏りあふこそ聞うかりけれ
しる知らぬ一つ席にまどゐして語り合ふこそ樂しかりけれ
こゝにのみかしこに遊ひみ園ふにもてなさるゝそたのしかりける
筒袖のつゝまやかにもち縫て軽くも装ふ世の姿かな
うつはする衣は縫んあやめより針目も清し着心もよし
よこれたる油はおちぬ同じくは心のあかも洗ひてしかな
年毎に黄金のたからなり出るこれぞ打出の小槌ならまし
時告る筒の音すなりひまを行く駒も晝食を今やはむらん
四方の海の千々の寶の品くらへ汐干潮みつ玉もあるらむ
居ながらに國めぐりする心地してけふも幾ひら讀つくさまし
進ゆく世に仇波のしつめにど作りしみ船けふおろすなり
うしどこそ聲をは立てねつひの道なれも羊の歩みすらしも

表忠塔 山中夕流 溪流水 冑 鍬 白 翻 活 握 洋 生 空

國のため身は碎けてもまこゝろはしら玉山にかゝやきにけり
深山邊のゆふとゝろきは荒鷺の高根にかへる羽音なりけり
岩淵に蛟すむてふ谷かけは水の色さへすさまじきかな
さくなたりに落たきつ水の勢ひは苔に埋れし雫ともなし
昔たれ名をたつかしら香くはしき香のみ冑に猶のこしけむ
名をきけは鶴のはしてふ鍬なれば千年の坂も安くつくらむ
いねつくどうたひほこりて賤の女か踏とゝろかす白の音かな
言さへく唐さへつりの鳥の跡ふみわけてこそ聲通ひけれ
聲をさへ貯ふ器ある世にはやかて物いふ影もいつらむ
手握りてゐやつくすなり外國の人はなへても親しかりけり
かはほりの翼に似たるかさなからたゝむひまさへ夏の暑さよ
おのか身の命のかきり預けおく黄金は後のそなへなりけり
國つちをつゝむ姿は見ねねども動けば風のけしきたつらむ

觀光團 襟卷 孤兒院 卓子 呼鈴 香水 鉛筆 椅子 種痘 電信機 飛行船 石炭 避雷針

かたみにや國のなからひあたゝむと打むれてこそ行通ふなれ
冬來れは我ももどめてあたゝけきやはら毛織の襟卷やせん
みなし子を拾へるそのゝなかりせは誰母代となりて育てん
こしかけて向ふ机の島山にかきあつめたる藻しほ草かな
鈴むしの軒はにゆらく聲ならて奥床ふかき呼子鳥かな
湯殿よりもれてかをるや手弱女か化粧の水のしつくなるらむ
けつりつゝ物かく筆はゆかまねとなまりてわかぬ文字もありけり
老人の腰にたかねし梓弓よりてかけなはゆかみのひなん
きのふかもくすしがうるゑし痘瘡か子の種はめさして露結ふなり
外國とむつひ結ひて一筋の糸の往來の繁き御代哉
天つ風おひ手にうけて雲の波わけゆく小舟誰かこくらむ
御食をたく薪とならん時まちし石の炭こそ世に出にけれ
鳴神のふみさく雲の衣手をぬふはこの針忘れさらなん

水力電氣 隧道路 無線電信 活善版 慈善會 音樂隊 唱歌 石油 電話 裁判官 看守 巡查 噴水

うちめくる水の力にあらそひてたねすも照す稻妻のかけ
岩かねをうつろにぬきて道つくり馬も車も通ふ御代かな
引はへし糸はなけれど大空に言ゆき通ふ道やつくれる
赤銅にゑりて造れるいかし文字世をふみ開く技折なりけり
いつくしみ普き御代は捨られて大路に叫ぶ孤兒もなし
鳴物の聲うちあはせ足並の列もみたれすねり歩くなり
君か代は深山の奥のうなゐまで千代に八千代とうたはぬはなし
あらかねの土の底よりわき出し石の油は世をてらすなり
これもまた真かねの糸の一筋に言とひかはし語りあふ哉
難波江のよしあし毎のふしの科わくらはにしもどりな違へそ
雪の朝風のゆふへはをりはへて檻の外に目を配るらむ
うしみつに靴の音すなり白波のよるの守りと打めくるらむ
空高く龍のいふくと見ゆはかり虹にきらめく水の色かな

唧筒
 議員
 陸軍大演習
 觀兵式
 觀艦式
 潛航艇
 水雷
 探海燈
 紙幣
 硝子
 東髮
 空氣枕
 水囊

もね上る火のは防くと打向ひ戦ふ水のいさましきかな
 選まれて事議る身は心さし正しくもちて片幸ひすな
 諸共にそこ見とめて戦ひの駆引すなりものみいたして
 治れる世にもとしく仇まもる軍もよふし見そなはずらん
 いくさ船海につらねて大君の見そなはず世そ静けかりける
 波の底潜りて仇の船近くねらひよるらんしのひに
 わたつみの底にしつめて仇の船さくいかつちの神のかしこさ
 あた波のよるの隈まであきらかに照すいくさの船かゝみかな
 たつきよき紙の幣かな物買ふも旅のかりてもこれにしかまし
 くらかりし奥庭までも透とほり晝をいさよふ朝からすかな
 たをやめかふさねし髪にあみさせて鬢の亂れをつゝみぬる哉
 口あけていふき入れたる風まゝらまけは夢さへ涼しかりけり
 眞清水をふくろに入れてひやしなはもゆる病もきねかへらまし

釋教
 新婚
 改過
 慨世
 神祇
 社頭祈世
 寄國祝
 寄海祝
 寄道祝
 幸遇太平代
 治世文事興
 天下泰平
 君恩及萬民

彼岸にいかて渡らん法の海のちかひの船にかちなかりせは
 動きなき岩床しめて妹脊川龜の萬世契りこむらん
 なして後どり返さるゝものならば世にはあやまつ人そなからむ
 きく毎にうきこそまされ力なき小田の蛙に國をゆたねて
 うつせみの人は知らしとなす業も神はかくりに見そなはずらん
 神垣にいはひてかくる御注連繩長きや御代のためしなるらん
 ためしなき昔にまさる君か代の國の榮ねはどこしへにして
 ゆく船の跡さへ見えて和田の原道ある御代は浪も静けし
 君か代は船路眞鐵路のみならず萬の道もひらけゆくなり
 四方の海波治りてうら安の國ふりしるき君か御代かな
 うきめかる海人の子さへも君か代は硯の海の玉あさるなり
 汐沫のとゞまらかり治まりて波風しらぬ御代となりける
 天つ日のやふしもわかぬ大めくみ御代の民くさむく榮ゆらむ

明治天皇皇后兩陛下御結婚滿二十五年御祝典に御題鶯花契萬春といふ事をよみて奉る

萬世とけふ契らすは鶯も花もかひある春やなからむ

明治天皇御製集日月帖ををろかみて

大御歌をろかむ袖にこほれけり民いつくしむ御惠の露

皇威四方にかゝやくをかしこみて

隔てなき天つ日つきの大御稜威てり赫きぬわたの外まで

明治神宮御祭典を遙に拜み奉りて

動きなき國の鎮めとつきたつる代々木の原の大宮はしら

主上御いたはりあらせらるゝ早く癒わさせ給はんことを謹みて祈り奉りて

天つ日にしはしかゝれる浮雲のはるゝ御空を仰く國民

東宮殿下外國行啓をかしこみ奉りて

年なかはいてまし給ひ外つ國とむつひ結びし皇子を時き

大正十一年十二月東宮殿下和歌山縣行啓をかしこみよみて奉つる

子の年のはしめに

くまの路やさかゆく御代の春にあふ青人草も花に咲くらむ

丑の年のはしめに

年月をこよみの鼠若かへりまた嫁か子とかしつかるらむ

老ぬれどうしとしもはた思はぬは立歸るけさの心なりけり

酉の年のはしめに

老はれてせんすへしらに年をのみどり重ねても祝ふけさ哉

午の年のはしめに

立かへる北のおきな馬ならは我ものりてや年を迎へん

朝ほらけ潮もかなひて行ものは眞帆にうけたる追風なりけり

櫻花めてたしと見る貴人のあやの御衣も只のいろかは

物こしの人の物いひうるはしみあはれ正目に見まほしきかな

清しと見るものちりもなく晴渡りぬる大空に田鶴か音ひゝく朝ほらけ哉

病全快してよめる(大正十一年八月)

残るともいく年月もあらさらんかりねの夢のあはれ時の間
いつの間にしらぬ翁となりぬらん世の長人どあはれまるまで
筆とりて書く文字さへもやさかみぬまたいたつきのいねぬなりけり
述懐をよめる中に

常はさも思はぬ人も事しあればふり起さるゝ大和魂

老ぬるとまつしき身こそ恨なれ人に後れん我ならなくに

大御代の手ふりもしらす天さかる鄙にのみやは住果ぬへき

いかにして世のたはことをきためましさり共と思ふ人もまよへり

功なき身にはあれども天地にはちぬ心は神そしるらん

吳竹の世に老ぬるそうらみなる老すは思ふ節もたてまし

世に出ん玉ならねども磨きなはまたき石には猶まさらまし

落たさち岩かねゆすりゆく水のかへらぬ世をはかこたさらまし

老述懐

寄玉述懐

寄水述懐

辭世

大かたはさらぬ別れをともすればゆるさぬものは日なりけり
世を捨てゝまた身をすつる時や來ぬたのしみつきてなからふもうし
よはひのみ常に誇りし老の身にうきを見するは命なりけり

物名

かすみ

つはくらめ

まくはかもり

やまふき

たちはな

山城

大和

河内

春來れは絶すもたつかすみかまのけふりに似たるいろに匂ひて

集ひよる人のぬくつはくらめや重れる名の世にたはうし

今まくは何の種かもり作りなりもならずも生業にして

吉野川やまふきおろす春風にこかねの花のちりてうくなり

雲間よりたちはな來て時鳥啼くは昔の香をしたふらん

春淺みまたさわかへり嵐山しろくもつもる今朝の雪かな

櫻さくやまどひこねてゆく雁は花にころものこさゝるらむ

峰かけてたつはかすみかうちつけに花のすかたを何かくすらむ

和 泉
攝 津
五 畿 内
國 名 十

五十音を句のかしらにおきて

秋風に入まねきしを霜やいつみやりのすゝきおき枯しけむ
みこもりにつづくむ葦のけふりより波も長閑にかすむ春かな
やまといふやましろ妙にいつみてもつもるは雪かうち解すして
あきつ島いよゝのとけきいかしよとかみのみいつやひた照すらん
あみひけはいそきはまてもうかふなりねものは多しおほ碓浦
からす來てきみを道ひきくまの路のけはしきみさかころくどそなく
さよ千鳥しはなく聲にすまの浦せき守いかにそてぬらすらん
たつた姫ちしほいそきてつゆの間のて染ならましどく紅葉せり
なよ竹にはの籬をぬけ出てねさしかためつのひんとすらん
はる風にひきて通ふふるの音をへたてゝきけはほのかなりけり
またすしてみるもたのしなむしさへもめてゝ鳴夜のもち月の影
や沙路にいり日は沈むゆふけしきわつら照してよ釣すらしも

らちの外にりきむ馬子かなるゐもなきれんせん芦毛ろ馬に劣ると
わりなしやゐなか育のうかれ女はゑひ泣するもをゝといふなり

詠 史

伊 弉 諾 尊
天 照 大 神
蛭 子 尊
素 盞 鳴 尊
大 國 主 神
少 彥 名 神
猿 田 彥 命
木 花 開 耶 姬 命
豐 玉 姬 命

みよさしの神ことをへて高ひかる日の大宮にとゝまらせけり
たふとしといふも尊し日の神のめくみにもるゝ物しなけれは
なとてかくあはめましかん足たゝぬ蛭子は御子の數にあらすと
神さかのたけくまさすはいかてかはやまた大蛇をはふらましやは
みよさしの國つくりにし功よりたくに主の御名はおひけん
はらからと共にちきりて國つくり萬の業もさたましけん
あもります道しるへして皇孫のみさきおほしゝ神そいそしき
うつ室にうけひて放つほのほよりまことの光あらはれにけり
かひまみし恨はあれとうるはしき玉の光やわすれかねけん

火 闌 降 命
神 武 天 皇
五 瀬 命
伊 勢 會
度 前
日 熊 野 前
熊 野 前
住 吉 野
出 雲 吉
布 留 雲
檀 山 原
珍 彦

みち干するあやしき玉にすへもなくうき目見てこそ末なつみけむ
天つ日こそひらにおひて八咫鳥みちひく方にすゝみましけん
大御手におひしいた手のしたゝりに海さへ血沼の名にそまりけむ
ゆふたすきかけてそ祈る神風や内外の宮の玉くしの葉に
世の中の青人草のいのちつくみけつの神そわたらひの宮
眞神の露の光も神さひぬいく世へぬらん日の前の宮
御心をなきのかさしにやはらけて鎮り居ます三熊野の神
大船のつもの浦のうら安く守りてこゝに住の江の神
大御名をさはにもたせて天の下國つくりけんみいさをの神
いそのかみふるやをろちのあらまさは神さひてこそ光そふらめ
八洲くに動かぬ御世の石すゑとつきかためけんかし原のみや
をたけひし神の御聲は釜山の松のあらしに尙残りけり
槁機こまきさらせ御船の内にひき入れて海つ路わたる枝折せしめつ

高 倉 下 命
道 臣 命
兄 狛 狛
弟 狛 狛
兄 磯 城
長 髓 彦
綏 靖 天 皇
野 見 宿 禰
崇 神 天 皇
田 道 間 守
景 行 天 皇
日 本 武 尊
弟 橘 姫 命

國むけの太刀の光に熊野山朝日すゝしく霧はれにけり
山ふみの御先に立て道わけし功をすくに名にたまひけむ
さかしらにこの兄うかしはるわなに返りておのれかゝりぬる哉
八咫からすいさわと誘ふ聲よりやまことの道はふみはしめけん
女軍と戦ふうちにしりへより男いくさ來てそはさみうたるゝ
御璽のまさるを見ても改めぬ倭け心のかたましきかな
まゝ兄の大むろの床に只ひとりふせりと開て弓矢とりけむ
生なからみさゝき守る人垣にかへし命のはにし親神
うま酒をうまらにかけて大御代はいく久しとやうたはしけむ
かくの實をもて歸りしもいかにせん聞わあくへき君しまさねは
神なからうけひ給ひて柏峽かしらの大野の石を蹴上げましけむ
かり拂ひかへりて放つ向ひ火に仇せし草は根さへたねけむ
野火にこそ共に立しか船しまく波のほの上はひとりふみけん

川上梟帥
仲哀天皇
神功皇后
武内宿禰
應神天皇
甘美内宿禰
仁徳天皇
菟道稚郎子
木菟宿禰
磐之媛命
履中天皇
反正天皇
玉田宿禰

かしこみて熊をたけるかたてまつる御名こそふさへやまとたけてふ
御さとしの神をうたかひ國なしと御琴押そけてそしりまし
たゝならぬ御身を静めの石うけひ重き御稜威そ神なからなる
百年を三たひ重ねていつ御代に仕へし功たくひなきかな
かる島のあかりの宮のあきらけき御稜威はわたの外までみちけむ
うましてふ名にしもはちす大君におよつれいひて世をはあさむく
三年まで大御あらかをもる雨にやかてうるほふ天の下かな
御位をゆつりあひつゝ三年へぬ今はときはめ雲かくるらむ
同じ日に産屋にいりし鳥の名をとりかへてこそ名におひにけれ
かひ蠶こそ繭をもつくれ大宮にふたりこもらはいふせからまし
大御酒にうらけ寝まして大殿のほのほもしらす馬にめしけん
難波江の同じ流れの水上のよしをたすけてあしをかるらむ
天皇のあらし守らて家に居て酒うたけするたふれにくしも

允恭天皇
衣通郎姫
安康天皇
大草香皇子
雄略天皇
草香幡梭姫皇女
猪名部真根
引出部赤猪子
浦島子
仁賢天皇
老嫗置目
武烈天皇
鮪臣

甘檜の岡に探湯瓮をすゑさせて氏姓をは定めましけん
御衣とほす光よつひに身をこかす兄媛の仇となりける哉
おもむろにかふかへまさは伯父皇子を討ちも給はし妃をもめさまし
露はかりあたし心はなき君になどまかつ日の御身にそひけん
かつらきの神も御狩に駒なへてなつさひましき君か御稜威に
うるはしき後の宮の御いさめに猛き御稜威もなこみましけむ
うるはしき友かなけきてかこちけんあたら墨繩たれかかけんと
三輪川にあらひし衣は年へても誠のいろそかはらさりける
ふたりねし常世別れて古里に歸れど今はよすかたになし
さすらひて馬草かりにし大御手にとりつたへたる天の下哉
荒野原露のおきめかなかりせは跡なきからを誰かしらまし
かゝひする歌垣にたち招けどもよそに袖ふる女郎花かな
なめけなるしこの柴垣へたてゝも踏やふられししこの柴垣

影 媛
 膳臣巴提使
 蘇我稻目
 物部守屋
 調吉士伊企儺
 大 葉 子
 大伴狹手彦
 上宮太子
 蘇我馬子
 推古天皇
 蘇我蝦夷
 蘇我入鹿
 孝德天皇

おほふよししひのはたてになひきけん玉とめてます惠そむきて
 雪ふみし跡をつなきて子の仇の舌をとらへて逆はきにせり
 くら野のしこの草葉に結ふ露何世を照す玉とめてけむ
 まか事にましこる世には國のため誠つくすも甲斐なかりけり
 こにきしらわか尻くへどをたけひて今はのきはもなつまさりけり
 尾花みなちりしこま野の風寒み霜にひれふる女郎花かな
 たくふすましらきなたむとひれふりしつま呼子鳥よそにきけん
 神なから天つ日つきの帝かね何佛のみいつきましけむ
 かしこしやわか大君をたばかりてうちにし罪はおき所もなし
 昔よりいつきまつれる天地の神を朕か世におこたらんやは
 まめならぬ遠つ親よりつもる罪今むくはれん時としらすや
 さつを等に狩出されて大内山角ふる小鹿うたれけるかな
 槻の木の下につとへてまつり事君と臣とのけちめたてけん

天智天皇
 鎌 足
 有馬皇子
 大友皇子
 天武天皇
 形 名 妻
 舍人親王
 太安麻呂
 長 屋 王
 役 小 角
 光 明 皇 后
 橘 諸 兄
 行基法師

いつの間に虎につばさのそひぬらん小鹿とらへて一くちにくふ
 世のさまを三鳥菅笠うちかつきひそみて龍の時をまちけん
 一たひはほしてかへせし濡衣をまた着せられてしほる袖かな
 吉野山春の光にけおされて散りしく志賀のうらなしの花
 世放れてしはし吉野に墨染の袖につゝみし天の下かな
 辛たかくきこねけるかな夜もすからならしゝ弓の末の世までも
 槻の木のおやつきゝに神代よりつたへしふみをあませましけん
 つたへこしあれの翁のふる言のふみをつはらに寫しどめけり
 しこつ言糺しもあへす責られて罪なきつみに身をは捨けむ
 かつらきの神をしはりし空言をいつまでとけすいひ傳ふらん
 湯殿たて千人のあかを洗ふ手になど御幣をは神にとらさる
 橘は常葉ならんを時なれや幹さへ枯る世をいかにせむ
 道橋をつくる功はおほけれど神のゆるさぬ枝折せしかな

惠見 押勝
僧 道 鏡
和氣 清麿
吉備 眞備
藤原 百川
桓武 天皇
大伴 家持
阪上 田村麿
弘法 大師
菅原 道眞
惟喬 親王
柿本 大神
山邊 赤人

胸の火をたきてあふりし焼餅をにくき法師に食れけるかな
高みくら登らんとする儂りのそのまかつこと神はうけめや
眞心にうさの神言つたへすはみもすそ川もかき濁る世に
くまてしもそれこそしれきひの酒下にこりせる心ありとは
いさきよく流れけるかな百川の水の心は一すちにして
も、川のたきちと、ろく勢ひに山部の御井は流れ出けり
うき雲の再び身にはかゝれども赤き心そはれ渡りける
事ありていかれば重し軽く身をなせは子らさへ慕ひなつさふ
龍をさへまねきて雨をふらせたる法の力の限りしられぬ
しからみを早くかけなは筑紫まで流れはせしを浪のぬれ衣
みかりせし交野の春は夢なれや雪にこもれる小野の山里
言靈のさきはふ時と奈良の葉の名にあふ御代に神やなり出し
いちしろく立放れても見ゆるかなふしの白雪和歌の浦つる

眞間手兒名
鬘 兒
小 野 篁
僧 正 遍 昭
尾 張 濱 主
大 伴 黒 主
文 室 康 秀
小 野 小 町
在 原 行 平
在 原 業 平
喜 撰 法 師
紀 友 則

望月のたれる面わを眞間の井に今もうつして見るよしもかな
三つの緒にかけて思へは玉かつらたねぬ歎きに身をやなけけむ
よつの船のりたかへてそ綱手繩八十島かけて流れいてけん
深草の露にひちたる昔衣年はふれどもかわかさりけむ
時を得てつはさもかろく老鶴のまひかなてたる雲のうへかな
春雨を涙にかりてをしみけんちりしく花に匂ふ言の葉
草深きかすみの谷の呼子鳥きわし日影をこひてなくらむ
おほけなくおもひあかりて末つひに移ふ花のいろ香なりけり
浮くさの根さし定めすたゆたひて誘ふ水にもまかせかねけむ
もしほやく海人の袖にもなれそめて三年はこゝにすまの浦波
しら玉は鬼にとられて消ね残るかたみの露や袖にこほれし
宇治山の木ぬれさひしき薄月夜一聲もれし杜鵑かな
梅の花君ならてとや手折けん色さへ香さへしるき言の葉

紀貫之
凡河内躬恒
壬生忠峯
伊勢御
貫之女
藤原基經
藤原道兼
藤原道長
源順
藤原公任
清少納言
和泉式部
紫式部

玉藻にはあきて歸れど土佐の海に沈みし玉や忘れかねけん
はつ雪をまつあはれとやなめけん我黒髪の白みゆくにも
うき物はなしときこねし曉はけに事わりの限りなるらむ
いせのあまの船流したる心地してかつらの露の玉よはふらん
鷲の宿はどかこつひと言にあるしの名さへかをりぬるかな
ことわりはありとも臣の我まゝに天つ位をおろすへきかは
さかりなる花をさそひて己れのみ梢にかへる風はにくしも
けつりにしふとき心はそれなからはこり立たる宮はしら哉
ゆくりなく水に移ふかけ見ても最中の月はさやけかりけり
言の葉にかけてひかすは音たねし瀧の白糸名たにしられし
今もなほ朽すありせはとき馬の骨買ましをあたらしその骨
あをかりし稻荷の山の下紅葉時雨の後に色にいてにし
むらさきの上にはかけし姿あけしをすの外山の雪の光も

赤染衛門
平將門
平國香
六孫王經基
平貞盛
藤原秀郷
藤原純友
藤原忠文
源賴光
渡邊綱
坂田公時
碓井貞光
卜部季武

我ならぬ人もさこそは有明の空にしくる月を見るらめ
天の下翹うたんどちかひけんうへ見ぬ鷲を征矢にかゝれる
立籠り城に防かはいた矢申負ひさらましを老の身にして
あふれぬるそのみなもとを尋ぬれば大内山の雫なりけり
父の仇むくいん時とおりたちておもふ矢坪を射て落しけん
あひ見れば起居ふるまひ亂れにし世のしれものをいかで助けん
筑紫かた人のむ蟻も子にまよひ立歸り來て網にかゝれり
ふたゝひも仇にむかはす歸り來て何望むらん功なき身の
鬼といふやからこと／＼討果し御代安らかに守る益良雄
小夜ふけてしのひ使の戻り橋鬼どもしらて馬にのせけり
雲かゝる谷より出し龍の子はつかふる外に世こゝろもなし
小初瀬やふる川のへの白波を都のつとに率て歸りけり
七年はさすらひしかとめくまれて君と父とに眞實つくせり

藤原保昌
能因法師
酒頼童子
源頼信
平忠常
源頼義
源義家
源義光
豊原時秋
安倍頼時
安倍貞任
清原武則
安倍宗任

ひはきすとよる白波もよせ兼つ吹く笛の音の絶間なければ
旅ころもかすみにかけて白川の關の秋風たちやまちけん
うつせみの人と生れて人ならぬ鬼の真似して人なやむらん
うち渡す沖の廣瀬のあら波も心にのりて駒や進めし
世を海に取りつく島もなかりけり兜をぬきて今は降らん
弓末もてうかち出し、眞清水は神のめくみのちはひなるらん
一つらの雁のみたれに目をとめて伏猪の床やおそろかしけん
慕ひ來し足柄山の月かけにつたへし笛の音こそ高けれ
慕ひ來て足柄山にさつかりし笛の調へそ身のほまれなる
まはらなる軍出立にをひかれておもふ矢坪にいさなはれけん
年を経て織出したるもちすりの衣のたてやほころひにけん
はかり事盡てや仇のうち出し天つさきはひ君にくたらむ
へたてなき世の常ならぬ恵みにそ汝も眞實の道つくすなり

大江匡房
藤原清衡
清原家衡
藤原千任
鎌倉景正
後三條天皇
源義明
白河天皇
鳥羽天皇
崇徳天皇
後白河天皇
藤原頼長
源爲義

教へてそ虎に翅をそへにけり伏猪の床を踏したくまで
心さし直きを見れば空蟬の人は種にもよらぬなりけり
おふけなきのそみいたきてはるわなにいかてかゝらん名におふ武夫
おのが身をさくともしらて逆しらをいひし舌こそ劔なりけれ
追しきてあらしの眞弓返し矢の響は末の世まできこゆる
國民は御代長かれといのる間に早くおりの帝にそます
いたつきになやみし身をもいとひなくふり起されし梓弓かな
白川や流れにこりてゆく末のかく亂るとはおほささりけむ
あした告る雌鳥の儘に任せてそ世は果もなく亂れ行らむ
都には跡たにどめぬ水くきに深き恨を結ひましけん
争ひて垣にせめきし御代よりや天つ御稜威もうすれ行らん
逆しまに流矢おひて道の邊の露よりもろく消しはかなさ
辻風にちると夢みしきせ長は長からぬ世のしらせなるらむ

源 義 朝
源 爲 朝
信 西 入 道
惡 源 太 義 平
常 磐 前
藤 原 定 家
遠 藤 盛 遠
袈 裟
二 代 后
平 康 賴
丹 波 少 將 成 經
俊 寬
西 行 法 師

かけたのむ老木のみかは小枝まで此柚人やきりつくすらん
今はとて戸むらに射たる鳴かふら鳴渡りけん後の世までも
にくみても尙あまりあり絶わし法起して人をおほくつみすは
いひし言さくいかつちに布引の瀧の白ゆふ碎けてそ散る
吳竹の伏見の雪に折れしより千代のみさをも埋もれにけり
かり初に君か摘にし百草の花のかをりは世に残りけり
人妻をおもひそめゆふあせしより墨の衣にたちやかふらむ
我脊子か衣かり寝の秋の霜消ぬしけさこそはかなかりけれ
ためしなきうき身の上やかこちけん同じ雲井の月をなかめて
さつまかた沖つ汐風こゝろあれや卒都婆は浪にゆられ寄けん
物いは、問ましものを古郷の花はうき世をいかに過けむ
いく秋かひとり鶉のなきにけん連來し雁は皆かへる世に
月にこそかこち顔すれ花といへは枝折かへても尋行らむ

江 口 君
小 督 局
高 倉 宮
源 賴 政
祇 王 祇 女
佛 女
平 清 盛
平 重 盛
熊 野
齋 藤 實 盛
平 賴 盛
平 忠 度
平 敦 盛

世をいとふ人の心をくみてこそ江口の水の色は見せけれ
かへり來てまたも浮世の秋の月すむ影もなき雲の上かな
今しはし御身を守りて時または天つ日嗣もつかれまさん
武夫のいかり沈めて時または八十字治川に船は下さし
秋にあふ浮身をかこつ柴の戸にへたてぬ月の影はさしけん
へたてなきいちみの雨のうるほひに人の恨も晴渡りけり
とこ闇と天つ光を押こめて胸はしり火はひとりもねけむ
たひらかに小松榮ねん世なりせは枯さらましを神にねくとも
ふる里の花ちらぬ間と旅衣たつの都の春にわかれて
ふる里に錦をよそふかさしにと頭の雪も墨にそめけむ
うから皆世に浮草とたよへと池のぬなは、苦しけもなし
名もしらぬ岡への子らに手折れてかひなく花は散果にけり
あれ行ん八島の浪に先立て扇の風にちるさくらかな

平 知 盛 潔よき君かいさめに任せなは波にかたよく船出せましや
 安 徳 天 皇 あはれ君波のそこひの浦までは御親の神のよさしまさぬを
 平 宗 盛 うから皆沈み果にし海面にくらは浮て漂ひにけり
 建 禮 門 院 世を海に沈まぬのみか波ならぬ仇名をさへや流すかなしさ
 源 義 仲 大木曾の荒山ましら内日さす都なれてもかしましき哉
 巴 女 裳裾さへ餘所にはひかぬ麻衣をつま重ねしと誰かしひけむ
 源 頼 朝 しはしこそ蛭か小島にひそみしか龍は時得て雲起すなり
 二 位 禪 尼 影くたつ夕日をあまのいたきてや八島の浪の底にいりけん
 尼 將 軍 移りゆく世の末までも注連ゆひて尾花なひけし女郎花哉
 源 範 頼 しつ枝にもおどる三川のかは櫻花にもさかす折られけるかな
 源 義 經 流れゆく弓は拾ひてかけくたつ夕日を波になにまかせけん
 義經雨晴しの窟にて
 岩むろに晴間をまつの雨やとりしはしほしけん鈴かけの袖

静 御 前 一筋に思ひみたるゝ心より賤のをた巻くりかへしけん
 真 田 興 市 くみしきてさくるさや巻鞘ながらぬけてもぬけぬ身をいかにせん
 佐々木高綱 橋の小しまの崎のほとゝきす宇治のわたりに名のりつるかな
 梶 原 景 季 こゝを瀬と立あらそへる波の上に心のはるひいかてゆるひし
 秩 父 重 忠 宇治川もひね鳥越も物かはと馬をせ負ひて先かけやせし
 梶 原 景 時 舌の根にかけていくその人さきし報い狐の崎と知すや
 那 須 宗 高 梓弓とるや手なれの八島かた波にすくれし名を流しけり
 田邊別當湛増 神かけて合せし鶏のかちさひに人の心をかためけるかな
 熊 谷 直 實 折どればよろひの袖にかゝりけり若木の花に結ふ白露
 土佐坊昌俊 天地の神にちかひしいつはりはすてし命のまことなりけり
 曾 我 兄 弟 狩人のふしの裙野に鳴つれて夢おどろかすほどきすかな
 大 磯 虎 女 大磯の深きなけきに沈ますはちかひの海に船出せましや
 辨 慶 心にもあらて君をはむち打しあたかの關の名さへうらめし

源 頼家
明 惠上人
藤 原國衡
源 實朝
北 條時政
後 鳥羽院
土 御門院
順 徳院
北 條義時
北 條泰時
北 條時頼
藤 原頼嗣
北 條時宗

まりの音におのか心を奪はれて世のなげきさへ聞ねさりけん
こけ衣身にはまどへど村肝の心はやまと錦なりけり
拂はるゝ風のゆく手に消にけりあつかし山の峯の浮雲
出行かは主なき宿とさくからに梅も名残の香にむせひけん
女狐に鼻毛よまれてふる狸むこもうま子も討んどやする
苦屋形竹の簀の子にたゝしましわれ鳥守どのらすかしこさ
おきの海の波にさすらふ君こひて同しうきめをからしますすらむ
佐渡の海さらにかへらぬ荒波を御衣にかけてやしのひましけむ
どつ國のためしをひきて三柱の大君流す罪そゆゝしき
なさけある人と誰かいふ奥山のどら狼にまさるたふれを
難波江のよしあしことを家つとに包みてかへる墨染の袖
光うすき鎌倉山の星月夜おほへる雲そいふせかりける
つくしの海外つ國船を沈めたる功は神のちはひなりけり

北 條高時
護 良親王
右 中辨俊基
二 條中將爲明
藤 原藤房
櫻 山入道
菊 池武時
殿 法印良忠
坊 門宰相清忠
准 后親房
源 顯家
片 岡八郎
野 長瀬六郎

遠つ親の逆しま學ひおのれまた大君島に流すつみ人
うはそくと暫し姿を装ひて世を三熊野に潜みましけむ
葛原にくたけし玉や今もなほ残るうらみの露結ふらむ
敷しまの道にはあらぬもゆる火の焰をふみて渡らましやは
鷹の巢の山杜鵑啼すてゝ雲のいつこに宿もどめけむ
今しはし心なこめて時または老木も花にさかましものを
武士の思ひいる矢の一筋にかへらぬ心神はしらめや
末見んと金戸にかけし眼にもまさるますみの鏡なるらむ
何事もそかひにねしくいくみ竹色はかへねと見るふしもなし
流れての世の鏡とそなりにけるひたちの小田の水莖の跡
宮城野の萩のにしきをかさし來て阿部野の露とちるそ悲しき
わか君を落しまつると戦ひし名もかくはしき花をりの塚
今はどて仇は近つく折よくも名のり出たる杜鵑かな

宇都宮公綱

楠 公

小楠 公

楠 正 儀

正 行 母

楠 正 季

辨 内 侍

伊 賀 局

新田義貞

源 義 助

源 義 助

源 義 助

源 義 助

源 義 助

源 義 助

いかはかりまよふ心の色ならんきのふにかはるあちさるの花
 世の中を思ひくみてや湊川かへらぬ水の泡と消ねけん
 みなと川さゝれをわけて拾はまし世に二つなき玉のくたけを
 ととも世になからへぬ身の契りをも忍ひの緒にや結ひかへけん
 ちりぬへき時を得たりと吉野山嵐にむかふ花のあはれさ
 吉野川そこに心を沈めてやうは濁る名をいとほさりける
 櫻井の花の言葉に色をへしはゝそも大和にしきなりけり
 七世まで人と生れて君の仇うたんとちかふ心たてあはれ
 ちりて後結はぬ心しりぬらん世になからへぬ花の下ひも
 山をぬく力ならずは吉野川いかて枝折のはしを渡らむ
 三越路やあす羽の露とくたけけり雁の玉章かけて待しを
 みよし野の花に別れて雪深き越路に落る雁の一つら
 船そろへ田邊の湊こき出しかひも渚に果てし君かな

名和長年
 兒島高德
 菊池武朝
 結城入道
 二階堂道蘊
 足利尊氏
 足利直義
 村上義光
 村上義隆
 赤松圓心
 信認入道
 尊良親王
 御 匣 殿

眞心を眞帆にあげてや船の上の山風高く吹おこしたる
 おひしけとどくみ車はすき阪のさかなき御代と一人泣けん
 北しくれいかにふるとも一本の菊は色たにかはらさりけり
 はりつめし心もたけし梓弓いまはのきはもゆるはさりけり
 かしこしやちかひの御ふみひらき見す大御使に返しまつらむ
 ふたつなき天つ日つきを二かたに引分けて世を亂しけるかな
 かしこくも竹のそのふの根をたちし身にうきふしのめくらさらめや
 をたけひて取かへしたる眞心は大和錦の旗たくひなき
 香くはしき末見るへきを道もせにあはれ散しく初櫻かな
 打はへし苦繩山のごこなめに變らぬ松のみさをなりせは
 死出の山しはしまてとて先かけし子ゆるの闇の跡たどるらん
 我が命刃の上にあつめてそららみを黄泉の下にむくいん
 淡路しまうきめかりしにかへり来てあはと見るまに消ねし墓なさ

宗良親王
勾當内侍
本間資氏
杉本佐兵衛
新田義顯
兼好法師
塩谷高貞
高師直
新田義興
光嚴院
細川頼之
長慶院殿
一休和尚

武夫の捨て、かひある命をたけひましていくさはけます
はかなしやしのひ越路の甲斐もなき神ならぬ身のうらめしきかな
和田の崎はた雲母坂弓取の射手のてたれの名こそとらけ
人泣がすすしき業も一ふしそ時に叶ひて功たつらむ
つきしたふ心さしを捨かたしわか命もて従者にかへてん
吳竹の世放れし身のつれ／＼に思ふふしをもかき集めけん
笹生山のかれ來し身の一夜たに露おき所なきを悲しき
武庫川の泡とさわけり笠に着て罪をおほひし蓮葉の露
いかつちの鳴はたゝきて武士の矢口の渡り仇ひしきけむ
あちなき世の争ひにあき給ひ山にこもりて雲かくるらん
すなほなる人をあつめて君守り内外のまつり時になかなへり
いてましの千劔の山の岩つゝし御言きゝてや色をかへけむ
三吉野の竹のそのふのひと本を法の船こく竿となしけむ

大内義弘
足利義滿
足利義教
赤松滿祐
細川勝元
山名宗全
足利義政
足利義晴
畠山義理
陶全姜
太田道灌
武田信玄
上杉謙信

生死のさかひの浦の呼子鳥何をかうらむよへとこたへぬ
末つひに霞の洞や仰き見し星の位もことたらずして
へつらへるねちけ好みて醜わさの洩しもしらすはかられにけり
腹くろの名のみ赤松白旗の城にこもれど罪はのかれす
花の御所とりかこみしやうへもなき逆しま事と知らず顔なり
ゆくりなく渡りに船どたのまるゝちかひはおのか追風なりけり
かきりなくおこりきはめて民めくむ道をも知らず世はみたれゆく
君もきみ臣もおみなり眞實なき世の安らかに治まらんやは
由良の川に船はくたけてよるへなみ身を墨染にかへて遁れし
はかられていつく島にや渡りけん黄泉の門出の旅としらすや
山吹の八重が一重もいはさりし實ならぬことに花はちれども
親をすて子をははふりて甲斐か嶺にかゝなく鷲のすさまじきかな
をりかへす波なかりせば水車川中島はくみやほさまし

今川義元
森蘭丸
平信長

豊臣秀吉

筒井順慶
竹中重治
柴田勝家
佐久間盛政
明智光秀
加藤清正

かゝのむとゑはにより来て鳴海かた鯨は網にかゝりけるかな
かきはきの小太刀のさやのきたの敷いはぬ心にまことこもれり
いかつちの鳴海のかたにくたきにし岩ほは君か千引なりけり
秋をまつ小田の稻葉の時しもあれ賤か利鎌にかゝれける哉
あし原のさやきはやみぬいさやこら虎伏す野邊も狩盡してん
むかしこそ手には取しか天の下ふみどろかすくつの音哉
いかつちのどろく方になひきけん峯に漂ふ夕立の雲
吳竹の世にはなひかぬ心より木の下かけをふしごはせり
天かける龍とも知らてあらそひし小谷のをろち存れけるかな
岩ほをも我そさく間と思ひしにどらはれてこそ夢はさめけれ
ふさはしき竹のほかな汝の身には誠のつるき汚れもせせむ
賤かたけ笹のしるしのさゝやかにあらぬいさをやたてはしめけむ
かた鎌の利かまの霜にをれふして草木色なきもろこしの原

豊臣秀頼
淀君
石田三成
片桐且元
小早川秀秋
細川忠興妻
山内一豊妻
徳川家康
春日局
眞田幸村
木村重成
大石良雄

天の下世をおほひにし大桐の若枝は花もさかて枯れけむ
よしあしの難波のことも知らずしてかき濁しけむ淀の川水
とふ螢青野か原をのかれ来て田中の子等に捕れけるかな
うしろ髪引かへさるゝ心地して長柄つゝみに駒なつみけん
松尾山まつ操をひるかへし思はぬ風やうらをふきけん
播く人の種にはよらぬ姫松の操や母のゆつりならまし
ひめ言を小笠の紐にゆひこめし心つかひはとかて見ねけり
むさし野に根さしかためて天の下衣笠なせる松は高しも
女狐のまつ毛よみにし古たぬきうまくはかりて世を奪ひけり
おほけなく雲の上まではひ上り龍の鼻毛もひかんとやせし
ひんかしの雲のゆきゝに目をかけて九度山かくれ時をまちけん
世々へてもかほりけるかなたきこめしかふとに残る君かたく香は
いかばかり嬉しかりけむ年つもるうらみも晴るゝ曙の雪

徳川光國
熊澤蕃山
加茂眞淵
蒲生秀實
高山正之
平田篤胤
徳川齊昭
毛利慶親
島津久光
井伊直弼
櫻田義黨
加賀宰相

大石は玉とくたけて玉よりもまたき光を世に残しけり
玉ちはふ神の心にあふひ草世にたのもしき根さしなりけり
めつらしき聲をかましを籠に入れてしゝまになれる杜鵑かな
後の世の鏡にせんとふる言の玉の光やみかきそへけむ
夜もすから醜のかたみに鞭うちて怒りし聲そ今も聞ゆる
朝日かけ句はぬ御世をなけきてや高山櫻仇にちりけん
玉たすきかけて盡しゝ言のはや神代にかへす枝折なるらむ
家の風吹つたへたる真心をつくすか君か家の子らまで
大君の上のみおもふ真心はかにもかくにもたゆまさりけり
かり捨てし道さまたけのねひす草何あかなはん太刀も交へす
世の中はうへ見ぬ鷺の一つかみつひに小鳥にはまれける哉
さくら田の雪の中より現はれて散りしく花の香くはしき哉
たゝならぬ都の雲の行かひに春をもまたて歸る雁かも

高杉晋作
眞木保臣
天誅組
彰仁親王
熾仁親王
勝安房
木戸孝允
大久保利通
西郷隆盛
伊藤博文
乃木將軍
明治天皇
詠史

枯残るその高杉の一本により來て雁のつらはなしけむ
大山の岩ほの中に埋めたる玉は千年の末もくたけし
はなけなるはやりこゝろを今しはし静めて待たは時を得ましを
草も木もうへなひきけん大み旗伏見の里に立そめしより
いその上ふるの大御田はことりてそのいにしへに打返しけむ
我君を誠の道にみちひきて守りしいさをたくひなき哉
真心にあかしとなりてくもらぬは月のかつらの光なりけり
石すゑとつきたつ國の太はしらなどからむしに身をまかせけん
四方の海たゝ一のみとひれ立てし筑紫の鯨網にかゝれり
國のため世のためをしむ命をはなとたふれらか手には捨けん
子等は皆さきにたゝしつ大君のはての行幸は我そつかへん
國ひきのむかしの綱によりかけてくり返しますあきつ大神
神なから御稜威を代々にあふれぬる高千穂嶽にあまりせしより

わみしらに御坂造らせ唐人に御池ほらせり聖の御代に
にこり井の上の亂れをかき流し御裳裙川の水脈定めけむ
天の下てり渡りけん桃山の花のさかりはしはしなりしも
女孤は皆わか物とおもふ間に狸おやちの世となりけり

保元物語をよみて

ふた方に臣もはらから引き別れあらそふ御代や悲しかりけむ

平治物語をよみて

都出て風ふく原のうきねより夢も結はぬ波まくらかな

承久記をよみて

われこそは新島守とのらしけん御言偲ふもかしこかりけり
かくれ家もなしとのらしてしほりけん御衣にかゝる松の下露

太平記をよみて

吉野山しはし旅寝のかり宮に花はいくとせ咲きてちりけむ
ますらをの残るうらみの魂やさは今も燃らん栗原のたに

古戦場

風すさふ後の山のはた薄まねけはよする須磨の浦波

すゝき原露ときわにしますらをの玉や穂に出て人招くらむ
賤か嶽月よりおろす夜嵐にくたけてさわくよこの浦波
すみのほる月よりひくく笛の音につら亂れゆく三越路の雁

支那詠史

帝	堯	天てらす月日の如くいたゝきて世の父母とあふかれにけり
帝	舜	つくしつる誠實ひとつに三たひまで身にわさはひはかゝらさりけり
禹	王	我門を三度過りていらさりき天にみなきる水をさむまて
桀	王	つたへこし聖の跡はふますともなと横さには道まよひけむ
紂	王	酒の池肉の林にたはふれてまかことをのみたのしまれけん
大	望	釣まけす餌をも設けす竿たれて聖の君をつらんとやまつ
伯夷	叔齊	山わけて折りしわらひもあはれなりもねて春まつすさひならねは
齊	桓公	誠ある臣のいさめに仇捨てゝ世にかくはしきさを立けり

張 簫 漢 項 秦 秦 朱 呂 孟 孟 孫 孔 管
 高 徐 始 不
 良 何 祉 羽 福 皇 后 章 母 子 子 子 仲

我君を聖の道にみちひきて民いつくしみ國とましけむ
 みたれにし千筋の糸を解わくる孔子そ正しき道開きけり
 天かける龍の心の氣高しや功をすて、雲かくるらむ
 みたれゆく世はなか／＼に孔子の道とかんとすれどさく人もなし
 機たちて我子いさめし糸口は唐綾をおる枝折なりけり
 種蒔しからたちの花咲ぬれと我にはつらくかをらさりけり
 はてもなくたはれぬる哉女郎花秋の宮居にひとりとたりて
 萬世もなからへんとておろかにも死なぬ藥を何もとめけむ
 わらは女男三千人を率て和田つ海の島のいつこに隈かくれけん
 八千草の花ふきちらす秋風を笛の音ながら夢にきくらん
 た、なはる千引の岩ほ砕きしは三人の臣の力なりけり
 みかき得しますみの鏡これこそは國のたからの一つなりけれ
 功をも名をも富をも望みなき身を奥山にのかれいりけん

韓 四 陳 朱 司 李 蘇 匡 王 光 董 彌
 信 皓 平 臣 相 夫 武 衡 昭 武 卓 衡
 如 人 武 君 帝 卓 衡

玉いたく龍とも知らて川またをく、りし鶴とや世にうとみけむ
 山を出て花さく春の宮守と老鶯のともに来てなく
 白なみに衣あたへてのかれしは功を立つる門出なりけり
 きのふまで薪負ひしを時を得てけふは錦の袖かへすなり
 から錦着て歸らすは此橋を過しと書きて時をまちけん
 はかなくも消わてけるかな空たきの煙になひく人の面かけ
 み空とふ雁の便りのなかりせは都にかへる春なからまし
 壁をうかち隣にあまる燈火の光をかりて書やよみけん
 あなあはれあたのねみしに手折れてひなにやつる、女郎花かな
 しらさりき花のすかたもうつつしるの筆のすさひに色かはるとは
 いつくしむ露のなさけのうるほひに世は草木までなひきける哉
 やつさきに身はさかれしを神はなほ柩をさへや粉に砕きけん
 劍よりなほもするとき舌の根にやかて我身をさきてけるかな

曹 操 徐 庶 劉 德 孔 明 關 羽 張 飛 姜 維 屈 原 達 磨 魏 徵 同 妻 李 靖

われ人にそむかしむとも人我にそむかしむなといひしにくさよ
 何事もよし／＼いひて笑ふかな世のありさまを岡目には見て
 呼子鳥母の心をとく知らはねらみし木から放れましやは
 三度までいほりを訪ひて招かすは我心さし誰かたすけん
 世の中をかなへの足と見据けん心かまへそ動かさりける
 さかつきの酒さめぬ間に仇の首とりてさかなにそなへつる哉
 いかつちの落かゝること橋の上をたけひし名そとろかれける
 何事もいすかのはしと違ふ世のくたちゆく瀬にしからみそなき
 真心をつくしの海は深けれと濁れる世にはすむかひもなし
 芦一枝海にをりしき浮ふなりこれそさどりの法の船人
 いさゝかもわたくしなくてよしあしをうつすは臣の鏡なりけり
 にこりなき水にすみそふ友かゝみ浮へる雲はうつらさりけり
 うたかひの雲は晴れても世の中に面なしとてや門をさしけむ

則天武后 玄宗皇帝 楊貴妃 安祿山 趙匡義 李綱 岳飛 秦檜 鐵木真 文天祥 朱元璋 徐達 國姓爺母

わりなしや再ひ春に崩出て、柳のかみに小櫛とらむ
 かたみさへ嵐ふく野に朽はて、枕にのこる鈴むしの聲
 おもひきや翅ならへん言の葉を玉のご世のつどならんとは
 十年あまりはかり設けし醜つ事時を得たりとおもひ立けん
 鳥狩して垣こねしより鵲のゆき合の橋はかゝりそめけん
 死して後をしまるゝほといける世に用ひられなは嬉しからまし
 山寺のひしりの教守りなは何ぬれ衣をかつかましやは
 うからやから皆流されつ碎きにしたからの臣のむくい知りけん
 石すゑはなかはならずてよみ路へと常なき風に誘はれにけん
 いく度かうきに沈めど心さし動かぬ誠神もめつらむ
 いたゝきし兜にひそむ小蛇はも龍てふ神の守るなりけり
 はかりこと的是はつさす思ふまゝ仇うちきたため功たつらむ
 ゑひす等に何けかされん我はこれ大和錦のなてしこの花

國姓爺成功 心さし何にたどへん武士の道のかゝみどいまもあふかむ
 康熙帝 君足れば百の司も足りみちて世は安國と治まりにけり
 曾國藩 百千たひ折れす碎けす身をせめて終にかたきの根をたちにつけり
 袁世凱 世の中をうまくはかりし古狸のちの毛色の見まほしきかな

旋頭歌

松迎年新 あら玉の年を迎ふとたてし門松
 新年海 年波はけさ立かへる音しつかなり
 朝春雨 まと近く朝は諫めて鶯そなく
 船けふりにきはひたてる四方のうなはら
 さめかてにねふり催す雨そゝきかな

花間鶯 おのつからあるし顔して花に啼くなり
 尋ね來し人もなけなる鶯のこゑ
 新樹妨月 水無月のてる日すゝしく茂る槻の木
 こよひまつ月のためにはつらき槻の木
 けふもまたほこくひもちて燕とふなり
 かきつはたにはへる澤にかけをのこして
 暮天月 夕そらにはりてかけたる弓はりの月
 たはさめる矢こそは見ねぬ西に入るらし
 虫の音 寝さめして虫の音きけは身にこそはしめ
 啼く虫のなみたや袖にこほれそふらむ
 枯野風 いとゝしく人目枯野となれる冬かな
 木からしに霜の花さへさきまよふらむ
 氷室 水無月のおものたつなり氷室守老翁

山水の畫に

今宵こそ心もどけて夢はむすはめ
畫たくみか筆のちからにかき流されて

狐

うすく濃くうかふも清し山川の水
小夜ふけて人もかよはぬ里の中橋

望

ふる雨に狐火はかりもね渡るなり
三吉野のかねのみたけにたてる白くも

龍

花散りし後もまかひてたてるしら雪
船しまき沖つ白波たつと見し間に

述

懷

いとひてもなほいとほしき塵の世そかし
雲の上にあらはれいて、天かけるなり

寄玉述懷

わかこゝろ光見ねねは人はしらしな
のかれる山さへちりのなれりとそきく
しらすともわかたまありとしる人そしる

塵

紙

ちりの世にすぎ返されてふた世ゆくなり
むかしわか雪にも恥ぬすかたなりしに

今様

花

きのふは吉野今日は奈良あすは白川あらし山花のさかりの旅衣かけ
てたつこそたのしけれ

紀元節

天つちのむたうこきなき國のしつめどかし原に大宮はしらたてし世
をあふくも高し日のみはた

新

竹

うきふししらす生出て巻葉にこもる白つゆの玉どこほれて朝風に涼
しくなひくまどの竹

池邊納涼

つゝみの小草うちなひく眞袖すゝしくふく風に汀のはちす露ちりて
なつはうかはぬ池の水

神 樂

月にひゝきてすみわたる糸竹の音もおもしろし天の岩門のあけかたに朝倉かへしなほうたふ

冬 菊

千代のかをりのなかりせは誰かはそれと白菊の花とやは見ん初霜のおきまとはせる朝ほらけ

冬 祝

嵐をやとす松もなし折れふす竹の聲もなし豊年いはふ君か代は光をそふるゆきのいろ

劔

國のたからはつるきなりつるきは國の守りなりたからとなりて國まもるつるきは國の光なり

隣

世に時めける富人もまつしどかこつわひ人もまかき一重をへたてにてすめどとなりぬの門つゝき

遊 女

よるへなきさのあま小船うき寝のをしの夢はかり結ふあし間の波まくら短き夏の一夜つま

鳥 貝

白良のはまにうちよする波のうめるかふたつ居る大おそ鳥のひなな

古 戦 場

るかひろひても見んからす貝
うしろの山のはた薄ほにあらはれてまねく夜は須磨の浦波たちかへりきしにくたくる月のかけ

長 歌

新 年 祝

門毎に松たてならへ家毎に注連ひきはへ日の御旗軒にかゝけて新玉の年を祝ふとうち向ふ餅の鏡はかための老も若きもゑらゝとさかみつくなり豊かなる御代のしるしは内日さす都のみかは天さかる鄙にもみちて立つく家庭の煙うちなひき民のかまどの賑ひまさる

はかためのかゝみの餅にうつるらん豊かなる世の年の光の

社頭祈君

一五二

玉ちはふ神のいかきにきのふこそ幣はとりしかけふこそは注連をかけしかよしゑやし
幣はとらねとよしゑやし注連は掛ねと月に日に心のぬさは朝にけにころの注連は掛
卷も畏かれともあきつ神わか大君の大御代は常磐かきはに八百萬千萬神のちはひまし
守り給へと我いのる心のいろは神を知るらむ

大神の御代よろつ世と神垣に心のぬさはとらぬ日もなし

君をのみ思ふころの一筋にかくる御注連は神やうくらむ

竹の畫に題す

春の來て花はさかねと秋を経て紅葉はせねとうるはしき常磐のみどり榮わたるこの竹
むらは吹風の音もきこねす降雨のつゆもみたれす下かけに老をやしなふ長人の千世こ
もるへきいほりまで造り立たり筆のすさひに

いをやすく雀も夢やむすふらん千節ある竹のふしのよければ

明治廿二年洪水の時よめる

山といへは動きなきもの川といへはかはりなきものとおろかにも何思ひけんかゝなへ
てふる長雨に山といふ山は裂たりその山のひちの碎けにたゝなはる五百つ岩くね茂り
あふ木群根こして川といふ川は埋みぬその川の水のたきちにかためたる堤碎けて百千
たる家庭をひたし遠白き水海なせは立ちつゝく家等ことく水底の藻屑と沈み水の上
の塵と浮へてちりなせる家のくたけに人は皆いはひ登りて打まねき助けよとこひ伏を
かみ救へとさけひ浮草の根に泣つゝも流れゆくそを見る儘に助けんとそこに思へと救
はんと此處に思へと船は皆流れ失たり筏さへ行へをしらに詮すへのたどきをなみと立
走りいはひもとほりふしまろひ叫ひ太息はるかなるこなたの岸ゆなかつるかも

海邊松

出立の清き渚に並たてる此松原よいつの世に種は播きけん奈良の葉の名におふ御代ゆ

一五三

一五四
けたしくもたちや榮ねし上つ枝は風きる領巾か下つ枝は浪きるひれか波風の吹よるま
にまひれの如なひかふさまは天かける龍にも似たり浦ゆすりとよもす聲は勝さひの軍
よはひと思ふまで聞きのよろしもむろの海の沖を深めてふかみるの見れどもあかす出
立の清きなきさの五百つ松原

茶

世を宇治の里とないひそ少女等か摘むや木の芽は朝夕に物喰ふ毎に稀人の問ひ來る度
にもてなしのはしきくさはひあつくぬるく人の心のほどくゝに適ふもうましこれこそ
は寒さあたゝめこれこそはあつさもさせ春の花秋の月の夜冬のあした雪見の圓居う
ちつけにむしろ放れすさかみつきのみての後の醉さまし目覺し草と皆人のたしなむ儘
に釜の湯のいよゝたきりて松風の音にも聞ね名くはしき宇治の木の芽の世にかをるな
り

勸學

浪わけて沖ゆく船風おひて浦はしる舟たは易くゆくには非すうら安くはしるにはあら
す物は皆斯くこそ有けれ學ひ草ちから車に七車積んど思はゝ年月のめくるにつけて我
どわか轄をかため心さし折れす碎けす織る機のひとつも落す學ひ得て功たつへき怠り
て榻のはしき空しくなせそ

碁

よる晝と石のいろもてわかちてもうちすさひては明暮のけちめもいはすけふもまた夜
つきてうたんのり物の花はちるども庭つ鳥家鶏は鳴くとも樂しさの限りもしらにあら
そひのかとなき石の勝負はあくこも知らすかくてこそ命ものひめ斧の柄の朽んをこと
もかきるへしやは

あくこなき鷺と鳥のあらそひにけふも殆ど暮んとすらむ

白波にうちよせられて黒牛のかたもなきまで崩れゆくかな

心にはあらぬ言葉のあらそひも角なき石によりてなりけり

倭人

一五六

芦原にところ得てはふ蟹こそは横はしるなれ芦蟹の禍事やするあしかにのよこ言をい
ふ人として人のふむへき道をしも只にはゆかす道ならぬ事等行ひ玉あはぬ人に瑕つけ
親しまぬ人をそこなひ世を渡る人は何人芦原の瑞穂の國の清き御民にて

旅

きのふこそ船出はせしか此朝け浪花にはてゝ眞鐵路の車にのれは時の間に千里ゆくな
り今の世はすりもはたこも取り持つはひとつの手提驛路の馬をもちからす内口さす都を
はしめ天さかる鄙の遠近思ふまゝ舊き跡たつね普くも名どころさくり數多はを費さす
してとふ鳥のおつることなく見て歸らまし

電氣作用をよめる

鳴神の音に聞わしいなつまは妹脊の道をたつか弓ひき別れけん天降來て雁に代りて玉

章の糸ひきつたへ眞鐵路の車をひきつ八衢のともし火となり夜も晝もはけみ勤めて一
日たにつかれも見わす一夜たにやすらひもせず空手せぬあやしいなつまたゝに居ぬく
すしいなつままた更にとつくとならばたかつまかねそ

春興

鶯よわれにともなへ胡蝶よわれを導け長閑なる霞をわけてすかの根の長きひねもす董
つみ柳かつらきつはなぬき櫻にむつれうちむれて羽袖なつさひ袂ほりどもにうかれて
行かへり野邊にくれなはなつかしきすみれの床ありわけ入りて山にくれなは香くはし
き花の宿あり家の妹か旅寢いとほひま過る駒ひきかへて歸るさは朧月毛にのりても
見まし

閑居殘菊

世放れてむくらに戸さすかくれ家は人も問はねは年月も知らしと思ふをしめゆへるま
かきの菊のやゝ／＼に色うつろひて露霜に枯れゆく見れば世の中は常なき物か老の波

一五七

よせぬ蓬か鳥ならていつこか常世霜かるゝ菊のみならず人も皆さかりすきなはおちか
みの雪どふりなんあはれ世の中

那智の瀧

真熊野の那智の高山落たきつ瀧の白糸千世かけて見るのよろしも水上は富士に通へや
時しらぬ雪そふり来る奥山は吉野にあれや非時に花の咲ちるふしの雪吉野の花をまの
あたり見る心地する瀧にもあるかな

ふしの雪吉野の花もどことにはにさきちる那智のたきつしらなみ

盗人をよめる

晝のうちに生業つとめ夜はしもうまいするこそ皆人の正道ならめ晝はしも深山にふし
て暮ぬれはみどりの林立出て人目を忍び門毎の軒に佇みうら毎の垣根にひそみ水さへ
もうちねふるてふうしみつの時を待得て壁をうかちやしりをきりてあたひなき寶をぬ
すみ真かゝやく黄金白銀とり掠め跡しら波と立去りて市にひさきつかしの實のひとり

をみして人はいさ知らしと思へど見そなはすかくりの神のいかてかはゆるし給はむ人
をして人はいはしめぬすみにし事あらはれていましめの繩目にかゝりなし得たる罪定
まればくさりもて身をはつななれいく年かひとやにいりてあちきなき世をすくすらむ
妻子あらはいかに悲しき親あらはいかに歎かむ横さらふ人の心のすへもなへなき
うかむ瀬もなくてや終に沈むらむ世にしら波の名のみ残りて

西行法師

ものゝふの弓矢投すて緋緘の鎧をぬきて黒染の衣をきんどとりすかるいとほしき子も
名残なく思ひ放ちて立出し心のまにま世を捨る君そゆかしき雲水の流れ渡りてごま
れるところ定めす玉くしけ二見の浦はそこよしと假庵結ひ小草もてしとねどなし石の
穴硯となし花かたま文机となし浮世には露まはらすすめる身にふさはぬことゝ鎌倉
の軍の君に貰ひたる白銀の猫も門に出て童にあたへ塵の如ころもはらひし心はへたく
ひあらめや面白き江口の里の雨やとり芦のひと夜のかりふしも心どめけむこゝろなく

鳴立澤の夕くれをきゝもらされて都には立ものほらす梓弓ひき返しては富士の嶺の煙を眺め行へをもしはし忘れつ吉野山花のちるまてわけ／＼てやかて出しとすさみけむ水の心のゆくかたにひたすら軽くありへてし涼しき心たれかあふかぬ

こゝろゆくかたに流れて雲水のすか／＼しくも世をわたりけむ

吉野懷舊

眞木のたつあらし山中に黒木もて御殿を造り御心をしはし吉野と吉水にいてましのまゝ天の下しろし給へは山邊には花咲をり川つ瀬に鮎子さはしり山川もよりて仕へん大宮は此處にませとも禍事の相ましこりて大御統ふたつに別れ忠ならぬ臣らそむきて畏きや皇御門にい向ひてなやめまつれば花くはし櫻もめてすさにつらふ紅葉もめてすひたつらに仇きためんど武士の八十件の男は劍太刀腰にとりはき梓弓なく矢手にきり取防ぎ御楯仕へて朝ゆふに御門守にし大御代は三御代を経しも末つひにいてましの宮跡たねて北ふく風に花やちりけん

御心をしはし吉野となくさめしそのいろなから花はちりけむ

逆賊幸徳某等始末

現神吾大君のしきませる八洲の國の御寶と生れし身をも四方の海に御稜威かゝやく日の本の民と呼はるゝ幸をしも打忘れてはおろかにも皇御國と言さへく外つ國からのなり立ちのけちめも知らず蟹かゆくよこしま學ひさかにくき逆しまなして世の中をくつかへさんどくはたてし其まかつこと見そなはずかくりの神のいかてかはゆるしたまはむ謀りこととみにあらはれかたらひしたふれこと／＼捕はれて掟の儘にそれ／＼に罪なはれけり昔より醜はあれども世の中にたふれはあれどかくのこと御國けかし／＼に罪たふれ言に出るもゆゝしいまはし

世の中をくつかへさんどくはたてしたふれか罪よ何にたどへむ

ためしなきわさたくみにしたふれらか逆しま事はきくさへゆゝし

肝むかふ心のいろは人毎の面のことくさま／＼の品はあれども生れ來つる國の爲には
いれ紐の同じ心に誰か國も皆つくすとふ皇國の民と生れてからふみをよみかく人の横
文字をよみかく人のたのもしと思へる人のともすればさかしらたちて梓弓本末忘れ神
代よりつたはる道をこちたくもときひかめつゝおのかしゝ學へる國のつたへ事勝れる
か如いひしらひおのか生れし皇國の掟を見ては何こともいひくたしけりかくのみの人
多からはしかのみの人さはならは類ひなき國の光も末つひに薄れやゆかん燕すらふる
巢忘れす雁すらも國思ふてふ鳥たにも斯くあるものを鳥ならば放ちやらなん現せみの
人のすへなさこゝもへはもたしはをらし利心をいよゝ振起したふれ等か本末忘れ我國
をいひくたしな言擧て打やきためん國の爲からふみよむとも横文字かくとも

國のため世のためとのみおもふかな心ひとつをともかくにも

老後述懐

かしらには雪をいたゞきひたひにはしき波をよせたつか杖腰にたかねてやゝ／＼に老
ゆくまゝに世の中にしこの翁と皆人のいとふとしらに若子らにくまゆしらにおほけ
なき心おこりにいつも／＼歌のむしろの上座にしかもありけに居やゝかに襟を正して
この道の我はかほしてすさめども時世うつろひあやなせる歌もよみ得すひかみたるね
せ言ましり筆どれはちひりゆかみて蚯蚓なすわさの拙なさ言靈や我を助けぬごる筆や
我をうとむと投すてゝ思ひかへせはごる筆のうとむにあらず言靈の助けぬにあらず老
ぬれは心おどろへなす事のかくそしこなるする事のかくそつたなき目もうとく耳もき
こねす手力のおちてゆるみて足さへもなゆ／＼なりておそや我今は何せん事もおろか
に

今よりは歌もよましな筆もとらす老ゆくまゝに身をはまかせむ

紀行文

一六四

蛭子の旅

今年の春、妻たみ子を携へ、參宮の道すがら、吉野奈良をはじめ、各地を逍遙しつゝ、名所古蹟をたづねばやと、あらかじめこゝろしらひして、出たつこゝろほひをも定め置つるに、たみ子いたはるところありて、ゆくりなく日を過しぬ、かくては吉野の花もちりなむとそゝのかしつゝ、四月十二日朝出たつ、田邊港より汽船吉田丸に乗り、和歌山青岸につき、こゝより人力車を雇ひ、紀和鐵道和歌山驛にいたり汽車にのる、まかね路のみぎひだり菜の花さかりいと景色よし。

ふりかへりすゝ菜さく野を見るかうちに皆山川そあとになりゆく道すがら風冴わかへりていと寒し、車よりながむれば、山に薄雪かゝれり、その山の名をとへば、かつらぎの峰つゞきなりといへるをきつて

風さわて雪をかゝれるかつらぎのみねよりつゞく紀路の八重山

名倉驛につき葛城館にやどる、亭主高野まうでせよとしきりにすゝむるにぞ、あす天氣よければ詣つべしとてふしぬ。

十三日、天氣よし、亭主朝とくより起出て何くれと用意せらる、さらばとてたみ子を駕籠に乗らしめ、おのれはかちにて出たつ、九度山より谷川つたひのぼる、岩がねはしる水の音いとすがたし。

谷川の岩きりとほす水の音にこゝろすましてゆく山路かな

椎出山のさくら大かたはうつろひたれど、なほさかりなるもおほし。

椎出山ひちをりのほるたひ毎にたむけにたちて花を見るかな

駕籠は遙かに登れるに、おのれはおくれがちにて、汗かきながら杖を力に、いきづかひするもくるし。

老の坂あへきてのほる苦しさを花はをかしと見てわらふらむ

神谷よりは、雪消の道のぬかりかわく間なければ、いとなづみがちなり、この程三日

一六五

ばかり降りつゞきて、今日なむやうく晴れたりといへり。

一六六

かゝなへてふりしく雪は高野山みのりの花のつもるなるらむ

寶城院につく、同院の庭の梅今花盛りなり、路傍の櫻を見るに、やゝふとみてあれども、いつかさきいてなむ、いまだ日を期しがたし、同じ國の内ながら、わが牟婁郡より季節後るゝこと、一月にもあまれるなり、晝饌たうべたれば案内者來れり、さて金剛峰寺にいたり、寶物など縦覽し、關白豊臣秀次公生害の間にて、

おもひきや星のくらゐをしめながら高野の霜とかけきねんとは
奥の院にて數のともし火を見て、

後の世をすくふたつきと照すらむたか野の奥の法のもし火

寶城院へかへれば午後三時なり、執事はいはく、今日は日あしもかたぶきたれば、今宵はやどりて、翌日とくたちねとねもころにすゝめらる、されど駕籠の者どちかひつることもあり、かつ名倉の宿へもかへり來といひ置きつれば、いとまごひして山をくだる、かへり路にはおのれも駕籠にのる、中途より日暮れたれば、ある茶屋にて提灯

をかりて、午後七時過ぎ葛城館にかへりきぬ。

十四日、天氣よし、朝どく汽車にのり五條町にて下り、蓬萊館てふ茶屋にて人力車を雇ふ、道すがら車夫にむかひて、かの天誅組の事をとふ、車夫のいはく、代官鈴木源内役所の焼跡は、今裁判所となれり、源内の息はある浄土宗寺院の住職にて、説教なども人望よかりしに、昨日死亡せられしとかたれり、おのれ鈴木源内には何のゆかりもなければ、ふとおもひ出て、その息住職某の入滅の翌日、いにしへの事を問ひつるも、佛縁の値遇めきて、懷舊のこゝろおこれり、とかうするうち、宇野の峠をこね阿田をすぐ、六田につきて駕籠をやとひ、たみ子を乗せ、かの例の靴をうがちてのぼる、吉野の宮にまうづるに、廣前の櫻風に散りかふを見て、

ぬかつけは袖にほひてちる花もむかしやしのみよし野の山
村上義光ぬしの墓にて、

ふみのうへに見るたに悲しま心をたてしたけをおくつきそこれ
いさきよく花にまかひて散りし名は今もかくはしみ吉野の山

一六七

下の一目千本にて、

一六八

まなかひにうけて千本の花も見つけふをわか世の春こちして
いく日見は花にあかまし吉野山みつの千本のちりはつるまで
銅の鳥居のふもとなる、芳山館につきて晝饌し案内を雇ひてまうづ、藏王堂の四本の
櫻のもとにて、

このもとにちるを誓ひし酒うたけ花もいまはのいろやそへけむ
吉水院にて御宸筆などをろがみておもひつゝけ侍る、

やすからぬ枕の下に聞かしかけむ岩かねはしるよし水の音

花にねてよしや吉野とうたはしゝみこと惚ふもかしこかりけり

いかなれはいてましのまゝ御代を経て大御稜威さへこゝにきねけむ

中の一目千本にて、

同じくはみつの千本の花さくら一つどころに見るよしもかな

如意輪寺にて、

矢しりもてやまと心を一筋につらぬきとめし跡をみるかな

梓弓ひきかへさしの門出にはなき敷にいる名をやとめし

塔の尾の陵にぬかづく、おほけなけれども、いにしへをしのびまつれば、さらぬ涙も
とゞまらず、袖のうへに花の散りかゝるもかなし。

みさゝきのこけの御門ををろかめは涙とともちる櫻かな

をろかめは花も涙とふりし世をこけの下にもしのひますらむ

末つひにこの山中に岩門たてかくれまさんとおほさゝりしを

花はかり御門守りて塔の尾のいてまし所ひとかけもなし

くものさくらを、

君ませはこゝも雲井のさくら花かりそめならず香に匂ひけむ

西行庵にて、

こけ清水音きくたにも涼しきをいかに心のすみまさりけむ

ちる花に人をまたせて吉野山また見ぬかたの春やわけ見し

一六九

あら／＼ありきて、宿にかへり駕籠をやとひ、たみ子を乗らしめ、おのれは吉野の宮のかたはらより、近道をたどりてひとり山をくだる、今四五日早かりせば、眞盛にあはましを、おほかたはうつろひぬとかこつもつきなしや。

とく來なは咲のさかりにあはましをなかはうつろふみ吉野の花
されどなほ目にあまりていひしらぬもをかし。

いかにとも名つけもしらす吉野山こゝろにあまる花の八重くも

六田川を渡りて、人力車を雇ふに、ごまりがけにゆくものなし、茶屋にていろ／＼周旋せしめ、やう／＼やとひてのる、このあたりの人力車の前ひきに犬をつかふなり、折ふし若人の、さながらまつげよまる、やうなる、おもひものと共にはせちがひゆくを見て、

人たますきつはくるまにのせられてかともる犬にひかせつるかな

葛驛にいたれば夕景なり、しばらくまちて汽車にのり、午後九時すぎ奈良につき、かま屋喜八許やごる。

十五日、小雨ふる、朝とく人力車にのりてまうづ、春日神社にてすゝめによりて神樂をたてまつるとて、

春日山氏人ならぬ我をしも神はへたてすちはひまさなむ

むかしの八重櫻は枯たれば、その跡に植繼ぬときけれど、花もなかりければ、

八重さくら名はうゑつけと花もなしいつかむかしのいろにさくらむ

所々ひとわたりめぐりて宿にかへり、たゞちに停車場にいたりて汽車にのる、龜山にてのりかへ、午後三時伊勢山田につき、三日市太夫次郎がりやごる。

十六日、天氣よし、朝とく同宿の陸奥人と共に、宿許にて神樂を奉れり、この三日市太夫次郎はむかし、奥羽の御師なりとさしに、今に宅内に神宮を祭れるを見れば、ゆゑあるならん、それより神苑會事務所に臨むに、委員渡邊憲一は、近來津市の博物館に、出勤せらるゝとの事にて、神苑會には關係せざるやうなり、その他に親しくかたらふ人もなければ、後刻また來て農業館を縦覧せんことをのべて一先宿にかへる、恰もよし同宿の福島縣人三名馬車を借り切るに、人少なればとて乗合をすゝめらる

おのれも幸の事なればこれにしたがひ、たみ子を連れて参宮す、外宮にまうで、

民やすく世をわたらひの宮はしらたかきめくみを仰く尊さ

内宮にまうづとて、五十鈴川におりたち、みだらしをむすびて、

いす、川清き流れにおりたちて結ぶもたうと神のめくみを

乗合の福島縣人は神樂を奉れるにより、その間神苑にあそぶ。

神風やいす、の宮の山さくらすかしくも袖にかをれり

皇太子殿下の御手づからうゑさせ給ひし松のもとにて、

御手づから植にし松のおひさきをおもへは千世の榮なりけり

天つちと共に久しくさかねませいす、の宮の御手うゑのまつ

正午宇治橋の詰なる角屋にて晝げす、福島縣人は、神樂を奉りし饗應あれば、おのれらは別室にて酒のむ、この席の直下宇治橋なり、物貰ひの男女老若うちむれて、長き竹竿に網を張りたるすくひたまもて、参宮人の投錢をこひて、なぐればあやまたす網にうけとるなり、さいつ頃までは穢多非人などのわざなりしを、遂に請負事業となり

て今は何村の百姓等なりときけり、相の山のお杉お玉の、物貰ひわざはむかしのほどにはあらずなりぬれど、なほ名残りはあり、さるにてもひがごとする伊勢人かなど、淺ましく心やまし、午後二見の浦につく。

二見かた注連ひく浪のうへにまたかゝるは春のかすみなりけり

しばし逍遙して、賓日館にいたり、陳列品を縦覧し、宿にかへりて出立の支度す、神苑會より書面來れるより立寄りしに、事務員曰く、今朝農業館縦覧のうへは、事務員一名案内して、参宮の便をはからんどの準備なりしに、時すぎても來り給はず、宿をたづねたれば今朝とく参宮せられしとの事にて、いと本意なかりしと、かたならゝにぞ、おのれそのあつきもてなしを謝し、さて本日はもはや發車の時間にせまれば、農業館は來年大阪博覽會のころ、またまうで來てゆる／＼縦覧すべしとのべて、いそぎ停車場にいたれば、汽車はのるうちにゆるぎいでぬ、夜に入り松坂驛につき、小西屋文右衛門がりにやごる。

十七日、天氣よし、朝とく宿の妻女に案内せしめ、山室山神社にまうづ。

わけまよふ古ことふみのしをりせよ同しをしへの末のうま子そ
うらもなくまことの道をひご筋に守るこゝろは神そしるらむ

宿にかへりて、厠にゆきしに、あやまりて禪をよごしたれば、下女にたのみて、さらし布もごめてまごふもをかし、人力車をはしらして停車場にいたり、二回目の汽車にのる、龜山と柘植とにてのりかはる、おりのぼりいと雑踏なり、草津驛におり、魚清樓にて書饌たうべ、これより二人乗人力車を雇ひてのる、野路の玉川の趾にて、

赫こねし野路の玉川来て見ればなかれし水の跡たにもなし

石山寺にまうで、をりかへし瀬田より粟津野をすぐ、木曾義仲ぬしの碑を見て、

粟津野のあわと消ねにし跡とへはひと木の松そこたへ顔なる

あわ雪ときねにし木曾の山さくら朝日てふ名やふさはさりけむ

三井寺にまうづ、櫻花なほさかりなるもあり。

さゝ波や三井のふる寺たつね来てむかしなからの花を見るかな

同寺の破傷鐘を、

鐘の音はさかねとしりぬくたけにし昔なからの世々にひゞけは

麓なる旅舎、植木屋治兵衛がり休みて、切符を買ひ、疏水の船にのりてよめる歌ごも、

さゝ波の近江の海も時なれやみやこにいさとひきのはしたる

山をぬきみつうみをさへひきのはす人の力をかきり知られぬ

水うみのそこさへうかつ御代なれば龍のみやこもやかてかよはむ

船つきより人力車にのり、京都三條大橋西詰布袋館につきてやごる。

十八日、天氣よし、朝とくより人力車をやごひ、神社佛閣にまうで、名所舊蹟をたづ

ぬ、平安神宮にて、

久かたの雲にそひねしいにしへの大宮つくりあふき見るかな

平野神社の櫻花種類いと多く目もあやなり。

あやにしき春は平野のみやつことなりて千くさの花になればや

北野神社は今年一千年祭の後なれば、なほ賑へり。

ちきりあれは今とし千とせにあひおひの一夜のまつもなほやさかわむ

金閣寺にてよめる。

こかねもてよそほひ立てし高どのに昔の名残なほのこりけり
水利工場を見て、

ひきおとす水の力にまかせてそさちを車の世にめくるらむ
くほさうる千々のたくみの事わさもこの一筋の水にかゝれり
白峯神社にて、

水くきの跡もゆるさぬうらみをもなこみましてや御代守るらむ
戻橋の名をきゝて、

とつきにはいみて渡らぬ戻り橋たひゆく人はこれにかゝれり
丸山公園の夜さくらを、

みやこ人花にうかれて玉ちはふ神のそのふに夜もつとへり
午後一時、清水町なる吉野屋にて晝饌す、雨ふりいでたれば、傘下駄などかりて立
づる、清水寺にまうづ、音羽の瀧を、

しらすはいと細けれと名におへる音羽の瀧はたねせさりけり
阿彌陀か峰にのぼりて、

天そゝる石のかたしろ仰きても御稜威はたかし豊國の神
大佛にてよめる、

そのかみのなるに碎けしまゝならて残るもあはれかたみはかりの
耳塚を見て、

から人は聞てや泣かん切取りしその耳塚のむかしかたりを
高臺寺にまうで、

かき濁る淀のわたりをのかれ來てこの古寺に月はすみけむ
血天井にてよめる、

板しきに残る血しほやますらをの消ぬうらみのしるしならまし
本能寺内の惣見院殿の石塔を見て、

知らさりきわか家の子のかくはかりまめならすして仇なさんとは

夕つかた宿にかへる、今日めぐりたる名所、なほ多けれど、歌よまざるところはみな省きつ。

十九日、雨ふる、天氣よくば、稻荷神社、八幡神社にまうで、山崎より汽車にのりなんと思へりしに、雨やまざれば人力車をはせて、七條驛にいたり、汽車にのり、稻荷八幡をくるまのうちよりふし拜み、大阪梅田に着く、こゝにて人力車を雇ひ、大阪見物す、まづ泉布館、中の島、松島、北野、生玉、天王寺などをめぐり、上町にて晝食し、午後四時道頓堀上大和橋松榮館にやごる。

二十日、天氣よし、朝とく人力車にのり、網島にいたり、往復切符を求め、汽車にて四條巖神社にまうづ。

花の香を袖にかけても偲ふかな繩手の風にちりしむかしを
いひもりの山より高し橋の香くはしき名はときしくにして

神社のかたはらなる、旅舎にて晝げし、あみ島にのりかへり、また人力車を雇ひて博物館をはじめ、心齋橋筋など見めぐりて松榮館にかへる。

二十一日、天氣よし、人力車にて難波驛にいたり、荷物は汽車にて和歌山に送り、住吉にておりて、住吉神社にまうづ。

波たゝぬ世に住吉の神ませは船のゆきゝもやすけかりけり
ふりにけるきしの姫松神さひて木末になみの音をたつなり

こゝかしこありきて汽車にのり、午後一時、和歌山市につき、人力車にて常の屋にいたり、晝げしてまた人力車を雇ひ、和歌の浦を逍遙せり、今夜汽船にのらんとせるも海上波あらければおもひとまりぬ。

二十二日、天氣よし、朝とくよりそれこれしるべの方を訪らふ、たみ子は佐川磯次郎許にとどめおき、おのれは何くれと用事をとゝのへ、それより岡山公園に遊び、舊城天守閣にのぼる。

たかどのにのほれは違のくまゝに蟻のはふまで見ね渡るかな

いはほもてかきあけ城の高矢倉いくそのどしか仇守りけむ

宿にかへれば、たみ子もかへれり、午後八時すぎ、人力車にのりて回漕店にいたり、

青岸よりまた吉田丸にのる、湯淺の海をすぐとて、

〇〇〇〇 沖つ波なきの湊はとくすきぬ日のみさきをもたゝにわたらむ
〇〇〇〇 二十三日、午前七時、田邊港にかへりつきぬ。

はじめ出たゝんとする時思へらく、道すがら詞友をたづね、をりくは歌よみて
たのしまばやと、あらかじめおもひまうけつるに、たみ子がまへつかたのいたつ
きによりて、かちありき得せざれば、詞友を訪ふことは、ふつに思ひとゞまりぬ
かつ此の記をひる子の旅としもなつけつるは、出立ちし日より汽車汽船のおりの
ぼりはさらなり、かりそめに物にゆくにも、人力車にのり、また山にのぼるには
駕籠にてたみ子は一足だにも、ありかざりしをもてなづけたるなめり。

明治三十五年五月四日しるす

璞屋あろじ可道

大正十二年三月八日印刷
大正十二年三月十日發行

編輯者 和歌山縣西牟婁郡田邊町大字下屋敷町三十七番地
兼 宇井 縫藏

印刷人 大阪市外中津町下三番五十三番地
光延 義民

印刷所 大阪市外中津町下三番五十三番地
光社

發賣所 和歌山縣西牟婁郡田邊町大字本町三十六番地
多屋 長三郎

振替口座大阪一三三二番
電話六十二番

67
401